

東方息子旅

永瀬皓哉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、紅魔館の前に捨てられていた赤ん坊

彼は門番の紅美鈴に拾われ、15年の月日を経て立派な箱入り息子に！

このままでは友達もできないと思った紅魔館メンバーは、彼を旅に出した

これは今まで紅魔館から出たことのなかった少年の旅の記録

(ストーリーはありますが、Prologueを除き基本的に短編集です)

目次

Prologue

日々は精進

—————

1

初めての友達

—————

10

旅の始まり

—————

18

短編集

夜雀の屋台

—————

27

世話焼きの人形遣い

—————

37

あねさま住職

—————

47

花妖怪のいたずら

—————

58

永遠亭の薬師

—————

68

白狼天狗の白黒の記憶

—————

78

Prologue

日々是精進

紅蓮ホン・レン鳳フウは人間である。

幼い頃に親に捨てられたがために「妖怪に拾われ」「妖怪に守られ」「妖怪に育てられた」……ちよつとだけ特別な人間。

人はそんな彼のことを、『紅蓮の翼』と云う。

「せいっ、やつ、はあああ……でえやつ！ だあああつ！」

しかし、そんな彼も決して「妖怪に囲まれていたから」人々に畏れられるほどの力を得たわけではない。今も、母であり師でもある紅美鈴に稽古をつけられている真つ最中だ。

母に憧れて伸ばした紅蓮の髪が翼のように翻されると、彼はそれすらも武器にすべく体を捻り、美鈴の視界を僅かに奪う。ただでさえ隙の少ない母に一手叩き込むには、多少の策は弄ずるべきだろう。

だがそれでも、母は強かった。蓮鳳の拳が美鈴の胸を捉えるよりも遙かに早く、彼女は奪われた視界を逆に利用して蓮鳳の足を払い、トドメの拳を彼の顔の一寸前で止めて

いた。

「あははっ、成長しましたね蓮鳳。さっきの機転はなかなか良かったですよ。髪を武器にするっていうのは、咄嗟の判断にしては上出来です！」

「その割に息一つ乱してないですよ、お母さん……。はあ、さっきのは結構いい線いっただと思ったのに……。褒めてもらったところ悪いですけど、正直ちよつと自信なくなりましたよ……」

しよげる蓮鳳の頭を、美鈴がくしゃくしゃと撫でる。未だ一本とるどころかまともな一撃すら入れさせてくれない「強い母」は、鍛練の時間以外ではいつもこうだ。

蓮鳳が泣きそうな時、苦しい時、諦めそうな時、自棄になりそうな時、そして……自信がなくなりかけた時、こうして頭を撫では「大丈夫」と声をかけてくれる「優しい母」になる。

「大丈夫、蓮鳳はちゃんと強くなってますよ。焦れる気持ちもわかりますけど、今のままのペースで鍛練に望めば、そう遠くない内に私と対等の拳闘士になれるでしょう」

「……お母さんと対等な拳闘士、か……。わかりましたっ！　じゃあもう一度お願いします！」

きつと自分は、紅魔館メンバーの中で最も非力な存在だろう。彼の主のように強力な力を持つ妖怪でもなければ、館内図書館に住まう魔女のように多彩な魔法が使えるわけ

でもなく、自分が最も得意とする体術も、師である母には敵わない。

唯一、対等に渡り合えるとすれば、メイド長の咲夜くらいだろう。それも、彼女の非常識なまでに強い「能力」を使わない状態で、だ。だから蓮鳳は、鍛練を怠らない。

この紅魔館を——大好きな母を守るため、彼はさらなる強さを求めて鍛練へと望む。水分を補給して小休憩を終えると、彼は再び美鈴と対峙する。

「……あつ、ちよつと待ってもらつていいですか。髪、まとめますんで」

ふと、蓮鳳からタイムがかかった。

「おつ、久しぶりに本気モードですね！ いいですけど、バンテージなんかで束ねたらせつかくの綺麗な髪が汚れてしまいますよ？」

「多少の汚れなら洗えばいいだけですし」

そう言つて、翼のような紅蓮の髪を一本の尾として束ね、袖につけていたヘアピンで前髪をまとめると、今まで鋭かった蓮鳳の目が少しだけ大きく開かれた。

これが、美鈴の言う蓮鳳の「本気モード」……視界を遮る長めの前髪をどかし、動きを阻害する髪を束ねることで動きに鋭さを与える——ようは自分の邪魔になるものをちよつとだけ排除した状態。

わざわざ「モード」なんて言うまでもなく、本人としては単なる気分転換のようなものだが……。

「じゃあ、仕切りなおして……行きますよ、お母さんッ！」

「どうぞ、どこからでもいいですよっ！」

ぐっ、と大地を踏みしめて、蹴る。直後、蓮鳳の姿は消えて、ほとんど同時に美鈴の懐の内に現れた。

しかし、美鈴も「最近の蓮鳳ならこのくらい出来て当然か」といった様子で、特に驚くことも慌てることもなく蓮鳳の突きを片手で受け止め、その軌道を外向きに逸らす。

同瞬、勢いのまま横を通過しようとしていた蓮鳳の腹に、美鈴の容赦ない膝蹴りが入り、動きが止まった。だが蓮鳳は腹の痛さや苦しさよりも美鈴の追撃を本能的に恐れ、倒れこむ一瞬、咄嗟に美鈴の足を払った。

無論、それは容易に避けられてしまったものの、それでいい。彼女が避けようとする一瞬さえ作れたなら、その一瞬は体調と体勢を整えるには十分すぎる時間に変わるのだから。

「相変わらず、本気モードの蓮鳳は速いですね。頑丈で速いって割と反則的ですよ？」
「そんな僕より速いお母さんは完全に反則まったなしですね」

そう言う蓮鳳だが、そもそも蓮鳳の「速さ」と美鈴の「速さ」は分野が違う。

蓮鳳の「速さ」は、どんなに離れた距離からでも極めて短時間でその距離を詰めることのできる「走る速さ」だ。しかし、美鈴の「速さ」はそうではない。

彼女の「速さ」は、どんなに素早い攻撃を打ち込まれても、それが肉体に到達・接触していなければその隙間を必ず見極め、それを防ぐことのできる「動く速さ」……高機動近接型にとっては、天敵ともなりうる「速さ」こそが、彼女の強みだ。

しかし、その違いを明確に気付いているのは美鈴だけ。まだまだ未熟な蓮鳳は、速さは全て同じものだと思っただけ。

今は鍛練だが、これがもし本当の戦闘であれば、この認識の甘さは間違いなく彼の弱点になるだろう。拳闘士にとって、肉体や動作の正しい認識は基礎中の基礎であり、それを損なっている彼は、きつと後でお説教である。

「はっ、たあっ！……せえやっ！」

「おー、スピードを威力に変えるスタイルは相変わらずですか。さすがの私も、この蹴りはあんまり受けたくないですね」

「受けたくないも何も、実際どれひとつとして当たってくれないくせに！」

全身を大きく捻った回し蹴り左右二連続からの、足払い。彼の得意とする蹴り技の猛襲だが、美鈴は上体を軽く逸らすだけで先の二連続をかわし、足払いすら容易に飛び退いて避けることに成功する。

しかし、跳び引いて間を開けたことが、蓮鳳の最も得意とする『跳び蹴り』を可能にさせた。彼の誇るスピードは突進によって攻撃力へとコンバートされ、美鈴の腹部を捉

えた。

(やったか……?)

蹴りが相手に接触した感触はあった。しかし、手応えはといえば微妙だ。あれほどのスピードで突っ込めば、相手はその場で倒れこむのではなく、後方へと吹き飛ばされるはず。ということは……。

(いや、耐え切られた……!)

「いやー、危ない危ない……。上出来です、もうちよつとで直撃でしたよ、蓮鳳。あんなスピードで蹴られちゃ、片手を滑り込ませるのが限界でした。お陰でちよつとお腹が痛いです……」

「耐え切った……だけじゃなく、片手を滑り込ませた……? そんな……今のは僕のフルスロットル全速力だったのに……!」

地に膝をついてしまいたくなる気持ちを必死に奮い立たせ、蓮鳳は美鈴に対峙する。

攻撃の一瞬に出せた全速力……あれを移動や回避……全ての動作に出せば、一撃くらい叩き込むのは不可能なことじゃないはずだと信じ、全身の力を抜く。

(フルスロットルがダメなら……オーバースロットルしかない! 全速力を超えた速さ

……超加速力で行くッ!)

ぐ、と足に力を入れ、狙いを定める。全身が限界超過による負荷で発熱していること

など気にも留めず、蓮鳳は『最速の一步』を踏み出そうとした。

「気法……ッ！」

「おつと……そこまでですよ、蓮鳳。鍛練は終了です。おそろくさつきよりも速く動くつもりでしょうが、無理にでも鍛練を続行する気なら、一度あなたの意識を刈り取りますよ」

だが、その一步よりも早く、霞む意識の中に聴こえる声があった。

きつと、もうほとんど本能だけだったのだろう。蓮鳳は「戦わなければ」という理性よりも、「美鈴の言うことを聞かなければ」という本能に従い、足の力を抜いた。

「ここから、こんなになるまで力を使っちゃダメじゃないですか。あなたはまだ『気』を正しく扱いきれていないんですから」

「ごめんなさい……」

足に全ての『気』と力を注いでいたせいか、同時にその場に倒れこむ蓮鳳を受け止めると、美鈴はにこにここと笑いながら、彼に叱りの言葉を説く。

本来、『気』とは生命力の流れを活性化させたエネルギーであり、それを操ることは自然の摂理に反する行いだ。

しかし、その生命エネルギーである『氣』を、呼吸法と体の動作によつて使うことを得意とする美鈴の教えにより、彼も僅かにであるが『氣』を使うことができる。

もつとも、その僅かな氣の使い道というのが、先ほども彼がやった通り、移動速度を上げる『動作法―水切り』と全身の重量を内向きに隠す『呼吸法―短』を兼用することによる超加速法『氣法―影断ち』のみというのが悲しいところだ。

「氣法……でしたっけ、蓮鳳の編み出した新しい氣の使い方」

「はい……。僕はお母さんほど巧く氣を使えませんから、呼吸法と動作法を組み合わせなきゃいけないのが難点ですけど……でも、この方法なら氣を必要な場所にだけ集中させられます。まあ、まだ足にしか使えないんですけど……」

「それでいいと思いますよ。私のように氣をそのまま使わず、氣の流れ道を作り、練つて、溜めて、発揮させる。きつと、それが氣というものの本来の使い方でしょう」

氣を使えば、生命力……すなわち体力も著しく浪費する。少なくとも向こう1時間ほどは立つこともできない蓮鳳を横抱きしながら、美鈴は彼を木陰へ運ぶ。

「私の氣をあげてしまえばすぐに回復もするでしょうが……さっきの無茶はちよつと危険でしたからね。罰として一時間ここで座学です。今日は呼吸法と、さつき見逃していた「速さ」の正しい認識についてですよー」

「短・深・止の基本法はもうちゃんとできますよ?」

「はい！　ですから、今日からはその発展……丹田呼吸法を学んでもらいます。基礎的な身体能力が著しく向上する呼吸法なので、蓮鳳の『気法』にも取り入れやすいと思いますよ」

座学も鍛練も己の為と思えばこそ——と主の姉には言われたが、それでも蓮鳳は座学が苦手だ。それでも座学を続けていられるのは、美鈴のおかげだ。

彼女が「蓮鳳が求めているもの」をしつかりと捉え、それを得られるための勉強を「蓮鳳が楽しく」受けられるようにしてくれるから、彼は座学が苦手でも嫌いにはならない。「座学が終わったらちようどおやつの時間になりますから、一緒に咲夜さんのところに行きましょう。今日は蓮鳳の好きなあんまんだそうですよ！」

「あんまん……！　やる気が出てきました。では、さつそくその丹田呼吸法とやらを教えてください！」

食べ物に釣られる蓮鳳の子供っぽさに少しだけ呆れながらも、その微笑ましさに胸をときめかせながら、美鈴は教鞭をとった。

「じゃあ、まずは——」

初めての友達

紅魔館の紅蓮ホン・レンファン鳳といえ、妖怪に愛されながら育てられた人間として、人間の里でも有名だ。

人によつては彼を「妖怪」と呼ぶし、人によつては彼を「奇跡の子」と呼ぶ。だが、蓮鳳がそれを素直に喜ぶことはなかった。人間の評価など、自分にとつては意味のないものだからだ。

彼にとつて、唯一にして最大の誉れは、紅魔館のメンバー——特に母である紅美鈴から褒められることであり、それ以外のことは、心底どうでもよいものであった。

そう——彼に会おうまでは。

「——で、結局のところ君は誰なんですか？ 僕を妖怪の山なんか連れてきて……食べるつもりなら全力で抵抗しますよ」

「普通そういうのは自分から名乗るもんじゃねえのか？ あと、俺は食うなら女のほうがいいだ。肉が柔らかいからな」

突如として紅魔館に現れ、妖怪の山へと蓮鳳を連れ去つた不定色にじの目を持つ天狗の男に、当然ながら蓮鳳は警戒の色を強くする。

しかし天狗の男はそんな彼の警戒心や敵意など気にも留めず、彼に背を向けたまま何かを用意し始めた。

「まあいい……。俺はこの山の哨戒を任されている白狼天狗、はるみそうま春海走馬だ。これから長い付き合いになるだろうからな、できれば覚えておいてくれ」

「春海、走馬……。ああ、文さんが言つてたサボリ魔で有名な……。確か二つ名は『山を泳ぐマグロ』でしたっけ？」

『山を駆ける駿馬』な。初対面でいきなり人様を不感症呼びわりすんじゃないやねえ」

天狗の男——春海走馬は、ようやく蓮鳳の方へと向き直ったかと思うと、彼に真っ白な玉を投げ渡した。

「これは……？」

「天狗のメシを食つても妖怪化しなくなる薬だ。お前のおふくろからしばらく面倒看るよう言われてるんでな、とりあえず飲め。……噛むなよ」

「……君のような不良天狗にお母さんが頼み事をするとは思えないんですけど」
「知るかよ。別にお前が妖怪化したいんなら止めねーぜ。俺は止めた、手段も与えた、その上で妖怪になる道を選んだ。そうお前のおふくろに伝えるだけだからな」

蓮鳳は怪しみながらも、それを口に含むことなく、ひとまずポケットの内側に入れて想真の話の続きを聞いた。

少なくとも、今のところ向こうに敵意は感じられない。言葉遣いが汚いのは、おそらく彼の癖であって、悪意ではないだろうと納得する。

「……今はお母さんを信じる。君とお母さんの間にどんな関係があるのかは知らないけれど、お母さんが君を信じたというのなら、僕も君を信じます」

「——の割には慎重だな、その薬を飲まないあたり。でもまあそういう奴は嫌いじゃないぜ、世の中あんまり他人をすぐ信じるもんじゃあない。案外、お前とは話が合うのかもな」

ニヤニヤと笑う走馬。そんな彼に不快感を覚える蓮鳳だが、同時にどこか安心感のよくなるものも感じていた。おそらく、彼の言う通り「似た考え方をしている」ところが、蓮鳳の心に余裕を作ったのだろう。

この妖怪は、自分に似ている。だから、自分が不利益になると思うようなことはしてこない。自分が本当に嫌なことを、この妖怪はやらない。そんな、信用ならない信頼感を、無意識の内に感じていたのだと思うと、吐き気がした。

「……まあ、そんなことあどうだつていい。お前もそろそろ本題が聞きたい頃だろ？」

「なんで俺がお前をここに連れてきたのか……お前のおふくろから俺は何を頼まれたのか、をよ」

「なんだ、教えてくれるんですね。てつきりその用件を終えた後で、事後承諾的に聞かさ

れるものだと思います。それとも、もう目的は終わってる……なんて言いませんよね？」

「ああ、まだ全部は終わってない……が、なかなかいいセンいつてるぜ。依頼の半分は、お前を紅魔館から引きずり出すこと……これはお前がここに居る時点で、もう終わってるからな」

紅魔館から引きずり出す。美鈴がそれを依頼したと聞いて、蓮鳳の心臓は飛び跳ねた。

14年前、紅魔館の門前に捨てられていた自分を拾って育ててくれた美鈴、そして紅魔館のメンバーたち。そんな彼女たちが、自分を屋敷から追い出そうとしていると聞いて、平然となんてしてられない。

「……何を勘違いしてるか知らねーが、絶望する必要はねーんじゃねえか？」

「……どういうことですか？」

「俺はお前のおふくろから、お前の友達を作るのを手伝えと言われたんだ。友達を作るのに、あの屋敷はちつと狭すぎるだろうってな」

友達……。確かに、今まで蓮鳳にとつての友達といえば、あの屋敷に住むメンバーが全てだった。

自分の屋敷の主を『友達』として接していた時期もあった。主の親友を姉と慕い、友

だと思いきんだこともあった。

だが彼女たちは『友達』ではなく『家族』だ。血の繋がりは確かにないが、それでも彼女たちは自分をここまで愛して育ててくれた、紛うことなき家族なのだ。

「……で？ お前はどうしたいんだ。おふくろや家族の期待に応えて友達を作るのか、それとも家族さえいればそれでいいなんてワガママを通して友達も作らず家族の期待を裏切るか」

「……ひどい言い方。選択肢がないじゃないですか」

「ないんじゃない。片方の選択肢を消したのはお前の意思だ」

想真は俯く蓮鳳に、右手を差し伸べる。

「もう一度名乗ろう。俺の名前は春海走馬……。お前の最初の『友達』だ」

「……友達……。か。そうですね、お母さんに言われたこととはいえ、君は僕と真剣に向き合ってくれた。真正面から俺と話し合ってくれた……」

寄り添うように話をしてくれる家族とは違う。向かい合って話をしてくれる友達。

それは、今までずっと『家族』としか接してこなかった蓮鳳にとって、初めての関係だ。

「——僕の名は紅蓮鳳^{ホンレンファン}。よろしく、走馬。君のことはまだちよつと信用ならないけど、

ひとまず君の『友情』を信じてみるよ」

「おう、それなら大船に乗ったつもりでいな。さつきも言ったが、他人を簡単に信用するような奴は面倒看きれないし、何より俺は『友情』のためになら命だつて賭けられる自信があるからな」

自信満々に笑む真真に、そりやあ頼もしい、と蓮鳳は笑った。



同じ頃、紅魔館では、蓮鳳を託した屋敷の面々が一堂に集まって深刻そうな表情を浮かべていた。

「……蓮鳳、ちゃんと走馬さんの言うことを聞いて仲良くしているでしょうか……」

「あのソウマとかいう天狗、もしも蓮鳳に何かあつたらロイヤルフレアじゃ済まないわよ……」

落ち着かない様子で心配する美鈴と、可愛い弟分を連れ去られて気が立っている寝巻き姿（のような格好）の魔女。

「二人とも心配のしすぎよ。レンファンなら大丈夫。この紅魔館の住人が、そんじよそこの妖怪にどうのこうのされるはずがないわ」

「……失礼ながらお嬢様、レモンティーにミルクを入れるのは止めておいた方がよろし

いかと……」

「レミイも人のこと言えないじゃない……」

レモンティーにミルクを入れるという暴挙を犯す幼女と、こうなることが予想できていながらミルクを用意してしまったパーフェクトメイド。

「……みんな追いつまれてるねえ……。わたしは別にレンならなんだかんだで無事にやってると思うけどなー」

そしてそんなメンバーたちを見て不思議そうにしながらも、にこにここと笑って宙に浮くもう一人の幼女。

「仕方ないじゃない。蓮鳳は私たちと違って普通の人間なのよ？ それももう、こんなになっちゃう頃から可愛がって可愛がって可愛がり続けた紅魔館の癒し筆頭なのよ？」

「いや、そこまでしてたのはパチエだけよ……。私たちはちゃんと普通に接してたわよ。いやちよつとくらい過保護になってた自覚はあるけれど」

彼女たちが深刻そうな表情をしている理由、それは宙に浮く金髪の幼女以外の全員が、蓮鳳のことを（赤ん坊感覚で）可愛がりすぎていたからだった。

実は今回、紅魔館のメンバーが断腸の思いで蓮鳳を想真に託したのは、彼の閉鎖的な交友関係を開放的にするだけではなく、紅魔館メンバーの猫可愛がりの『囲い』から彼を救い出す意味もあったのだ。

「そういえば、妹様はあまり蓮鳳のことを心配なさっておられないようですが、仮にも妹様のお世話係なのですが……その、寂しくはないのですか？」

「そうね。咲夜の言う通り、もちろん寂しいとは思うよ。でもレンは必ず友達をたくさん作ってわたしたちの元に戻ってきてくれるって信じてるし、それまではお姉さまやみんながいるでしょう？」

にこやかに、だけど誰よりも強い心を持つていた金髪の幼女——フランドールの返事に、他のメンバーたちの……特に姉・レミアアの目頭が熱くなった。

「あの情緒不安定で誰も信用しようとしなかったフランがこんなにも立派になって……！ 咲夜、今日の晩ご飯はフランの好きなものにしなさい。パチエとメイリンも食堂に来なさい。みんなで食べるわよ」

（レンがいなくなつたからかシスコンが悪化してきてるなあお姉さま……。まあそんなお姉さまも大好きだけど）

フランドール・スカーレット。紅魔館きつての問題児だった彼女は、今この場においては唯一無二の良識人であった。

旅の始まり

「さて、旅の準備はこのくらいでいいだろう。お前は財布の確認だけしておけ。他の何を失くしても困らないが、金がないと雑草を食うことになるぞ」

「わかりました。……けど、走馬そうまに荷物を全部持つてもらって本当にいいんですか？

「これでも結構鍛えてるので、そのくらいの荷物は持てますよ？」

「そういうのは荷物持った俺より速く動ける奴が言うんだな。こちとら仮にも天狗だぞ」

天狗。数ある妖怪の中でも特に強力な種族であり、高度な社会性を持ち、その速度は吸血鬼とほぼ同等と言われる。もともと、「高度な社会性」を持つという割に、蓮鳳レンフウの目の前にいる白狼天狗はサボリ魔で有名なのだが。

とはいえ、さすがに鬼や吸血鬼ほどでないにせよ、スピードだけでなく腕力もそこらの妖怪とは比べ物にならない。まして、いくら鍛えているといっても比較対象が人間である蓮鳳では、まともに競うことすら馬鹿馬鹿しいレベルだ。

「でもまあ、自衛手段がある分そこらの人間よりマシだろ。だから財布を持たせてんだ。お前がそれ失くしたら俺のメシも雑草になるってこと忘れんなよ」

「うーん……わかりました。でも、もし疲れたらすぐに言つてください。体力が戻るまでは持ちますから」

「わかつたわかつた。そんじや早速行くぞ」

一晩世話になつた走馬の家を出ると、周りは見渡す限りの木、木、木。妖怪の山に建てられた、家とは名ばかりの掘つ立て小屋というのが、外から見るとよくわかる。

呆けてないで来い、と声をかけられてようやく歩き出してから10分ほどすると、登つても下つても先が見えないほど続く階段が目の前に現れた。もしも転げ落ちれば、間違ひなく命はないだろう。

「この階段に沿つて下つていくが……お前、飛べるか？」

「浮遊法ですか？ はい、お母さんから一通り習つていたので問題ありませんよ」

体重を内向きに隠す『呼吸法―短』と、体を宙に浮かす『動作法―錘忘れ』を掛け合わせることで『気法―風切り』が可能となる。最長で一時間だけという制限付きではあるが、山を下りるくらい時間であれば十分であろう。

手間はかかるがきちんと飛んでみせると、走馬は「ならよし」と言つて飛び始めた。慌てずその背を追うと、走馬は少しスピードを落として蓮鳳と並び、声をかける。

「飛べるとはいえ、スピードはこんなもんか」

「そうですね。頑張ればもう少しくらい出ますけど、急いでいるわけでもないですよね

「？」

「まあな。ただ昼メシが少し遅れるくらいだ。それでもいいか？」

「構いませんよ」

そこからしばらく無言のまま、二人は山を下りていった。途中、一言二言は言葉を交わすが、そのどれにも意味などなかった。場繋ぎ的な言葉だけが口から洩れて、それに飽きて沈黙を良しとすれば、それはさほど気まづくはならなかった。

20分ほど経って、ようやく階段の終わりが見えてくると、走馬が「ここからは体力作りも兼ねて足で階段を下りるぞ」と言い、二人は着地した。終わりが見えたといつても、軽く見積もってまだ500段ほどはある。

体力作りというのは、旅に必要なからという意味か、それとも母親である美鈴に修行をつけるように頼まれたのか。どちらにしても、旅の終わりがまだわからない以上、体力はつけておいて困ることはないと思ひ、蓮鳳は彼の意見に従った。

「この階段、上の方には何があるんですか？」

「神社だよ。巫女と神様が住んでる」

「神社……。なら、先に御賽銭を入れてから下りればよかったですかもしれませんね」

「気まぐれな神に旅の無事を祈るくらいなら、何が起きても大丈夫なように自分を鍛えた方が建設的だぜ」

それは仮にも神の住まう妖怪の山の守護者とは思えない言葉ではあるが、そもそも彼の特異性は働き者なはずの白狼天狗でありながらサボリ魔となつてゐる時点でわかりきつていたことなので、蓮鳳はそれ以上を追求することなく次の句を告げる。

「いまさらなんですけど、これはどこに向かつてるんですか？」

「まずは人里に向かわないと食糧が手に入らない。だから最初にここを下りて紅魔館と霧の湖を横切りながら人里に向かう」

「なら——」

「紅魔館は横切るだけで、近づかないし寄らないぞ。というか、まだ旅初日なのにもう出戻りする気か？」

そんなあ、と言いながらも反論しないのは、母や家族から何を求められてこの旅をしているのかを理解しているからか。

この旅は、ただ漫然と幻想郷を巡るものではない。幻想郷を巡つた先で出会う者たちとの交流を経て、今よりも多くの視点から屋敷と主を「守る」ための術と、その神髄を見出すための旅。

だからこそ、今ここで紅魔館に戻つてはならない。次に母と会う日には、今よりもつと成長した自分を見て貰わなくては意味がない。次に母と会う日には、今よりも

「いつかお前のおふくろに、今より立派になった姿を見て貰いたかったら、今はその気持

ちをぐつとこらえて前を見な」

「はい……。つて、なんか後ろから近付いてきてるような……」

「ああ、あれは俺の追手だから気にしなくていい」

「いやいや追手つてなんですか!?! 気になりますよ!」

止まりなさいい、と背後から追いかけてくるのは、犬の耳と尻尾を持った天狗の少女。走馬の追手、ということとは、彼女は白狼天狗の一人だろう。

「案外早かったな、椛。けど天魔に申請して有給をちゃんと取っておいたはずだろ？」

「いったい何の用だ」

白狼天狗の少女の名は犬走椛。白狼天狗という天狗の中の役職において、走馬の同僚にあたる。

同僚とはいっても、両者の仲はとりわけ良いわけでも悪いわけでもない。あくまで同じ時期に生まれ、同じ時期に白狼天狗としてのお役目に就いたというだけの、いわゆる腐れ縁だ。

椛はチラ、と蓮鳳を一瞥すると、溜息交じりに走馬へと視線を向け直し、やや苛立ちの混ざった声で捲し立てる。

「この不良天狗はよくもまあ堂々と……有給は明後日からです! 今日はお勤、それも早番です! 一昨日スケジュール表を渡したばかりじゃないですか!」

「あー、そうだったか？　悪い悪い。けど今日は外部からの頼まれごとでこの人間を人里まで送らなくちゃならないんだ。それともお前が代わりにこいつを連れて行ってくれるか？」

「え？　な、なんで私がそんな面倒ごとを……」

「それが嫌なら俺もサボらせてもらう。無理矢理連れていく気なら全速力で逃げさせてもらうし、仮に捕まれば全力で抵抗するぜ。それでいいなら、まあやってみろよ」

逃げる。そう言われてしまうと、権としては従わざるをえなかつた。なぜなら、俊足で名を馳せる天狗の中でも、この幻想郷において最速と名高い「ある天狗」にあと一歩のところまで喰らいつくスピードを誇るのが、この春海走馬だからだ。

その「ある天狗」に協力してもらい、捕まえることは不可能ではないだろうが、どうにも権はその天狗とあまりソリが合わない。不仲、とまではいかないが、性格的な相性があまりよくない。どちらかといえば、権がほぼ一方的に噛みついていく状況だが、だからこそ協力は得られないだろう。

となれば、権に残された選択肢は首を縦に振ることだけだつた。さつきよりも深いため息を聞いて、「じゃあそいつを里の宿まで届けてくれ」と言い残すと、走馬は彼女に荷物を預けて去って行った。いくらサボリ魔とはいっても、約束を反故にするような人物でないことはわかっているのだから、権がそれを追うことはなかつた。

「はやつ、もう見えない……」

「あんなですけど、仮にも白狼天狗の中では最高戦力ですからね。本気の文さんにあわやというところまで追いついたのは、この幻想郷で彼だけですよ」

「あ、じゃあ走馬つてホントに凄い人なんですわね。……つて、すみません。申し遅れました、僕は紅蓮鳳。走馬の友達で、紅魔館の門番見習いです」

「ああ、これはどうも。私は犬走椋。妖怪の山の白狼天狗。走馬とは幼馴染というか、腐れ縁というか……そんな感じです」

走馬から預かった荷物を背負いなおし、その荷物をどちらが背負うかを巡って数分間ほど無駄に費やすと、結局ジャンケンに勝利した椋がそれを背負うことになった。

「男として情けない……」

「むしろこんな荷物を人間に持たせたら私の方が妖怪として情けないですよ」

山を下りきつて林を抜けると、すぐに目に入ったのは大きな湖。蓮鳳としても見慣れたその湖の中心に、彼の帰る家——紅魔館がぽつんと建っている。

「そういうえば、あなたは紅魔館の門番見習いですっけ？」

「はい。今は修行も兼ねて見聞を広げるための旅をしています。といっても、始めたのは今日からですけど」

「立派ですね。人間にしては随分と逞しい身体付きだとは思いますが、まだ若い……」

というか、随分と幼いような？」

「はい、今年で15になります」

じゆうご……つ、と驚く表情を見せる椀。あと二年もすれば婚姻年齢に届くとはいえ、15歳は人間という種族にとつても子供の範疇。妖怪ひしめくこの幻想郷において、旅に出させるような年齢ではない。というか、むしろ何歳であつてもさせるべきではないだろう。

いくら修行のためとはいえ、人間の子供を旅に出すとはさすが鬼畜の住む屋敷と名高い紅魔館、と椀が頭を痛めていることなど露知らず、蓮鳳は肩に留まった雀に間食用のおにぎりの米粒を与えていた。

「別に15で旅といつても珍しいことではないでしょう？ 咲夜だつて僕と一つしか違わないのに、よくお嬢様に連れられて色んな異変に首を突っ込んでいるみたいですし」「いやいやいや、あなたのところのメイド長を普通の人間と比較しないでください。彼女は人間の中でも特別枠です！ 単純な戦闘能力にせよ、能力にせよ、弾幕のセンスにせよ、彼女を基準にしたら生物のハードルが格段に上がってしまいます！」

「あ……まあ能力はすごいよね。でも弾幕はあんまりわかりませんが、格闘戦なら僕と大差ありませんし、そこまで飛び抜けてるわけじゃあ……」

「飛び抜けてますよ！ もし本当に彼女と同レベルならあなたもたいがいです！」

気迫のある表情で捲し立てる彼女を見て、どこか納得のいかない様子ではあるものの、それ以上は言い返すこともなく「そっかあ」と言つてその話題を打ち切った。

そうしている間に、既に湖を離れ、里の入り口が見えてきた。

「さて、そろそろですね。私が里の中まで入つてしまうとあまり印象がよくないでしょうから、道案内はここまでです。申し訳ありませんけど、荷物もここからはご自分で持つていってください」

「いえ、十分です。権さん、ありがとうございます」

「どういたしまして。よい旅を」

互いに手を振り合うと、権は妖怪の山へと戻つていった。蓮鳳は地面に置かれた荷物を背負うと、しっかりとした足取りで里の中へと入つていく。

ここからが、ようやく旅の始まりだ。

短編集

夜雀の屋台

蓮鳳レンフウと走馬そうまの旅が始まってしばらくの時が流れた。最初は慣れないことばかりで失敗も困惑も多かったが、今では堂々とした様子で山道も獣道も難なく進んでいる。しかし、いくら遅しく成長しても変わらないのが三大欲求。特に旅の足が徒歩である以上、空腹ばかりは如何ともしがたい。

旅の初めに山のように買い集めた食材も、いくら日持ちするとはいえ期限があるので、無暗に渋ることもできないので、底を尽きてしまった。加えて、今日は人里を少し離れて無名の丘に来ていた。そこに住まうという、毒を操る人形の妖怪を見て、格闘ではどうにもできないタイプの妖怪を知るためである。

見に行くというのは表現そのままに、本当にただ遠目に見て学習するという意味だ。その人形はまだ生まれて間もない妖怪であるため、人間よりも無知で相手の力量を計る知恵もない。そのため、相手が人間だろうと強力な妖怪だろうと近付いてきてしまうため、彼女が纏う毒にやられてしまわないための措置だ。

昼過ぎ頃に着き、その生態を学習するのに一時間半。生まれたての妖怪というもの自

体が珍しいことも相俟って、無知ゆえの危険性や対処法を語る走馬にも熱が入っていた。前日は魔法の森で野宿だったので、徒歩で人里まで戻ろうとすれば夕日が沈む頃になるだろうか。どう考えても、昼食をとることは叶わない。

「今日は歩き詰めだったからな……人里につくよりも前に、里の外にある屋台で食事をとろう」

「屋台、ですか？ さすがに、里を離れると人はいないでしょうし、屋台なんてなおのこと……」

「そりゃ、人間の屋台はな。俺が言ってるのは妖怪のやつてる屋台さ。商いという方法で人間と交流する妖怪もいるってことも知るべきだろうし、何より客として行けば他の妖怪に襲われかけた時は人間の屋台より安全だ。よほどのことがない限り、妖怪は自分の縄張りを守ろうとするからな」

商いとして人間と交流する妖怪。人間の里にも、幼い子供たちを対象に寺子屋を開いている半妖がいることは、蓮鳳も知っている。しかしあれは商売というよりも半妖側の趣味・道楽という側面が大きく、必ずしも人間側に求められてやっているわけではない。

もちろん、妖怪が屋台をやることも道楽ではあるだろう。しかし、そこに金銭のやり取りが発生すれば、店側には商品を提供する「義務」が発生する。そういう意味で、少なからず金——言い換えるなら人間に縛られることをよしとする妖怪がいることは、蓮

鳳にとって目新しい発見となった。

もう一つ加えるとすれば、今日は徒歩と勉強でずいぶんと空腹である。食材があつたとしても、料理をする気力は頑張らないと湧いてこない。自炊よりも金がかかるが、その手間を省けるというのは、有り難い提案であつた。

無名の丘を下り、魔法の森に沿って開けた道を一時間ほど歩くと、まだ人里は見えてこないが森のそばを抜けた。そこで、まだ少し残っていた木々の木陰に、赤い提灯を照らして食欲をそそる匂いを漂わせる屋台がひとつ。もしかして、と思つて走馬に視線をやると、彼は無言で頷き、その屋台へと歩みを進めていく。

「よつ。今日も客足寂しくやってんのか？」

「あら、走馬さん。お生憎さま、ここ最近は里の自警団のお兄さんとかが常連さんになつてくれてるおかげで、昔より随分と懐が温かいわ。それより、そっちの人間は？」

「紅魔館からの依頼で、幻想郷を一緒に見て回る旅をしてる蓮鳳つてガキだ」

「紅魔館の門番見習いの紅蓮鳳です。はじめまして」

「はじめまして。私はミスティア・ローレライ。この屋台の女将をやつてるわ」

ミスティアと名乗る彼女は、聞けば夜雀の妖怪だという。夜雀とは、夜に現れる雀、または蛾や蝶の妖怪で、ちっちゃち、ちっちゃち、という雀のような鳴き声を伴つて人間の視力を奪うという。見てみれば、彼女の背中にも羽根があるが、どう見ても雀のそれではないし、虫

のそれにも見えない。

走馬の補足によると、夜雀の妖怪とはいっても、雀が化けたものではなく「夜雀」という種類の別物であるため、必ずしも雀と同じ見た目をしてしているわけではないのと。

たしかに、そう考えてみれば蓮鳳にとつて身近な吸血鬼も、蝙蝠と縁のある妖怪とはいえ、蝙蝠のような羽根を持つのはレミリアだけである。妹のフランドールの羽根は、とても生き物のそれとは思えない。もつと無機質で、そもそも飛ぶためのものではないようにも思える。

というか、幻想郷において「飛ぶ」ことに羽根を必要とする種族がどれだけいるだろうか。能力次第ではあるものの、羽根も何も無い人間が飛べる以上、羽根がなければ飛べないなどとなれば妖怪として笑いものである。

「じゃあ日本酒を一杯。こいつにはお茶。八つ目うなぎの蒲焼きを二枚ずつくれ」

「かしこまりました。でも珍しいわね、サボリ魔で有名なあなたが、人間の旅のお供に付き合うなんて」

「長いこと生きてると、知り合いじゃない奴なんて限られてくるからな。こいつ、紅魔館で15年も引き籠もってたらしくて、俺ですら存在を知らなかったからな。興味が湧いたってだけだ。それより、お前こそ里の自警団なんか常連にしちまってよかったのか？

対峙されてもおかしくないだろ」

「自警団といつても、理由もなく妖怪を襲うような人たちじゃないから平気よ。こっちが人間を襲ったりしなければ、あっちだって何もしてこないわ。それにほら、食事ならたまにちよつとおどかせば小腹は満たされるし」

おどかせば空腹が満たされるというのは、夜雀に限らず、妖怪という広い範囲の括りに共通する性質によるものだろう。妖怪は、人間に怖れられて存在を維持する。逆に言えば、人から怖がられなくなった妖怪は「ちよつと不思議な能力を持ったただの人」に近い無力な存在なのである。

そのため、彼女に限らず多くの妖怪は人間を恐怖させることでその存在を維持しようとする。それは可愛らしい悪戯のようなものから、命を奪うに至るまで様々だが、少なくともミステリアに限って言えば、それは前者だということなのだろう。

妖怪の性質については、里の半妖が寺子屋で教えているため、自警団の者もある程度までは黙認しているという。ただ、さすがに怪我をさせたり病を巻き散らしたり、人が死に至るようなレベルになると、容赦なく退治する。そういう意味で、ミステリアはだいたい「まとも」な類の妖怪と言えるよう。

「はい、お先に日本酒とお茶。蒲焼きはもうちよつと待つてね」

「こりやまたなみなみと……。さて、じゃあ今日もお疲れさん。明日の旅路の無事を

願って、乾杯」

「乾杯。僕が成人するまであと2年かあ……。2年後、一緒にお酒飲みましようね、走馬」

「そうだな。その頃には「見習い」の三文字が取れてるといいな」

幻想郷における男性の成人は17歳。こうした時代ごとに変わる決まり事は、幻想郷の賢者とされるスキマ妖怪が、外の世界の情勢を加味して調整しているとのこと。

幻想郷が外の世界と隔絶されたのはここ数年での出来事だが、それ以前にも幻想郷という場所自体は外の世界に存在していた。異世界というよりも、妖怪が集まる単なる山奥の里という感じだった。しかし明治時代になって科学が発展し、力を失いはじめた妖怪側を保護するために幻想郷の賢者が里の境界に常識と非常識を分ける結界を張ったことで、この世界は独立したのである。

現状、外の世界と幻想郷の両方を観測できるのはその賢者たるスキマ妖怪くらいだという。そのスキマ妖怪によれば、現在の外の世界では満20歳で成人ということになったそうだが、そこまで影響の大きなものではなかったため、幻想郷が隔絶される直前まで適用されていた「男性17歳・女性15歳で成人」がそのまま効力を発揮している。

そのため、蓮鳳と同年齢くらいの子が宴会などで酒を飲んでいても、男はあと2年ほど成人が後なので飲めないのである。精神的な意味でも肉体的な意味でも女性の方

が「大人」であるとされる理由のひとつが、この成人年齢の違いによるものだろう。

「はい、おまちどうさま。八つ目うなぎの蒲焼き2つずつね」

「きましたね。じゃあ、いただきます……あつっ！ ……あつ、美味しい！」

「屋台出すだけあつて、なかなかのもんだらう？」

妖怪の好む味付けと、人間の好む味付けは、時として致命的なレベルで異なることがままある。特に人を襲って食べるタイプの妖怪は、調理などという手間をとらず生き物の生死にあまりこだわらず食べてしまうからなおのことである。

幸いにして、ミステイアは夜雀の妖怪である。夜雀は人の視力を奪う妖怪であるが、それは言い換えると「視力を奪われて怯える人間の恐怖を食べる妖怪」ということでもある。人間そのものではなく、人間の悪感情を食べるため、味覚はそこまで狂っているわけではない。

加えて、彼女個人は屋台を開くほど「料理」という文明に興味を持っていた個体であることも功を奏した。結果的に、人間の味覚とそこまでかけ離れず、そこそこに料理に興味があり、人間嫌いではなく、何より調理の腕がよかった。その全ての条件が合わさって、この屋台を構えているのだ。

格の高い妖怪なら人間の味覚に合った料理は作れるが、それを人間に食わせて商売にしようとするほど酔狂な妖怪は彼女くらいのものだらう。ましてや、こう言っではなん

だが彼女は低急妖怪である。人間の味覚にかけ離れていないことと、人間の味覚に合った料理ができることはイコールではない。そのことから、彼女の努力のほどが窺える。

「こんなに美味しくて人間ともうまくやれてるのなら、里の中でちゃんとしたお店を開けばいいんじゃないですか？」

「うーん、それはどうかな。いくらうまくやれるとは言っても、人間からはどうしても警戒されるだろうし、妖怪としても人間に馴染まれ過ぎて恐怖をもらえなくなったら困るし。それに私自身、お金とかお店の規模とかにはそこまで興味ないから、こうやってたまに来てくれる人とおしゃべりしながら料理できればいいしね」

「なるほど……。確かに商売はともかくとして、人間と妖怪の立場を尊重し合いながら共存するには、里からちよつと離れたこのくらいの距離が一番いいのかもしれないですね」

「そういうこと。あ、そういえばこれは商品じゃなくて私のつまみ食い用なんだけど、少し作りすぎちゃったから、よかつたら食べる？」

そう言ってミステリアが出したのは、透明の瓶に詰められたらつきようだった。既に3分の2くらいの量になっているが、本人によると瓶の九分目ほどまでたつぷり詰まっていたらしいので、本当に作りすぎたのだろう。

2枚の小皿に小さな山ができるように盛って、二人の前に出される。走馬が箸でひとつつまんで食べると、蓮鳳はそれを物珍しそうに見て、同じように口に入れた。

「すごく酸っぱいですね……。これはらつきようという料理なんですか？ それともこの実のようなものの名前がらつきようなんですか？」

「あら、らつきようを食べるのは初めて？」

「はい。見るのも食べるのも……。名前は聞いたことありましたが、食卓には出たことがなかったのですね」

「そう。らつきようは別名「オオニラ」って言って、ニラの仲間よ。ほら、あのすごく匂うやつ。にんにくとかと同じ仲間ね。その根っこの部分を甘酢漬けにしたのがこれ。だから料理としての名前は「らつきようの甘酢漬け」なんだけど、みんな「らつきよう」でひと括りにしてるから、めんどくさいわよね」

「うちの食卓に出なかったのはにんにくの仲間だからですかね……？」

でもニラたっぷりの野菜炒めは割と喜んで召し上がるんですよ……。と言って頭の上に疑問符を浮かべていると、いよいよ空も暗んで一番星が始める。早めの夕食とはいっても、さすがに月の光を頼りにしなければならぬような時間に帰るのは避けたい。

蓮鳳と走馬は追加で蒲焼きをもう一つ注文すると、「これを食べたら帰ろう」とどちら

からともなく提案し、二人で笑いながら頷いた。

「あ、これ初めてのお客さんにあげてるの。うちのお店の小皿。屋台を始める時、何がどれくらい必要なのかわからないまま勢いで注文しちゃって山のように余ってるから、よかつたらもらって」

手渡された小皿には、大きな丸の中に達筆な文字で「雀」と書かれている。改めてミステリアの外見を見直して、「雀……？」と困惑する蓮鳳をよそに、彼女は楽し気に歌を口ずさみ始めた。

「あんまりローレライの歌に聞き入るなよ。本人にその気がないから一時的にだけど視力が落ちるからな」

「あつ、それ聞くとやっぱり夜雀なんだなって思います……」

世話焼きの人形遣い

「あいつは人食いで有名な闇妖怪だな。特に類似する種族のいない、いわゆる一人一族の妖怪だ。種族としての特徴がないため、その習性や倫理観も個人単位で異なる。いわゆる「対抗策を講じるのが面倒」なタイプだと言えるだろう」

「闇妖怪って聞くと、なんだか強そうなイメージですけど、あの丸い球体がそうなんですか?」

「あれは本体があつた闇の中にいて、その周囲を闇が覆つてただけだ。ちなみにその闇のせいで本人も周りがあんまり見えてないらしい」

「もしかしてバカなんですか?」

もしかしなくてもバカだぞ、と言いつ切る走馬そうまの視線を辿れば、魔法の森から霧の湖の方へとふよふよと飛ぶ真つ黒な球体が、そのまま背の高い木に衝突して墜落した。どうやら本当に周りが見えていないらしい。

とはいえ、どんなに頭が弱くとも人食い妖怪。球体の中から現れた幼い子供のような姿をした少女さえ、人間である蓮鳳レンフウからすれば十二分に脅威となりうる。二人はそんな闇妖怪に近づくことなく、その場を後にした。

今日は人里で必需品を買い揃えて二日目。まだまだ鞆の重さも十分に感じられるが、その大荷物は相変わらず走馬が背負っており、蓮鳳がその重さを体感することはなかった。

「闇妖怪は当然ながら闇を操る程度の能力を持つわけだが……そういえばお前、旅が始まってからこつち一度も能力を使ってる様子がないが、なんの能力もないのか？」

「あ、いえ……僕の能力は使おうと思つて使えるものではないというか、むしろ常時発動タイプというか……いや常時でもないですね。どつちかつていうと周囲の影響に誘発されて発動するタイプですね」

「まだるっこしいな。スパッと見え」

「うーん……こういう表現が正しいのかはわかりませんが、お嬢さま曰く「影響を受ける程度の能力」だそうですね」

影響を受ける。つまり、周囲の影響によって蓮鳳自身が何かしらの変質を起こす能力ということである。しかし、人間だけに限らず、あらゆる生き物は常に周囲の影響を受け続けるものであり、決して蓮鳳が特別だというわけでもない。だというのに、それを加味した上で「影響を受ける」というのはどういうことか。

頭の回る走馬でさえも、いまいち納得のいつていない表情で首を傾げているのがおかしくて、蓮鳳は思わず苦笑して、その手を差し出した。おそらくは掴め、ということだ

ろうと思ひ、走馬がそれを握り返すと、蓮鳳の雰囲気が少しだけ……気にしなければ絶対に気付かないようなレベルにだが、変化したような気がした。

「どうです？　ちよつと変わったでしょう？」

「ああ。なんというか……人間なのに少し妖力みたいなものを感じるといふか……いや、ただの妖力じゃないな。もつところ……俺っぽいというか、天狗っぽい妖力だな」
「そうです。僕は周囲の霊力・妖力・魔力、あるい疫病・ウイルス・病原菌、はたまた雰囲気や気候といった、普通の人なら感じ取ることのできないレベルの要素に対して過敏に反応し、その要素に「近づく」能力があるんです。今の場合だと、天狗そうまの影響を受けて天狗にちよつと近付いた感じですね」

まあ長期間その影響を受け続けないとすぐ元に戻るんですけど、と笑う蓮鳳だが、その口の中——ちらりと覗き見えた「鋭い犬歯」を見て、走馬は「そういうことか」と納得した。

彼が紅魔館で育ち、門番に厳しい修行をつけられたといつても、彼自身はただの人間である。そのため、そもそも門番の修行をこなすどころか、それについていくこと自体、本来なら不可能なはずだ。しかし、現実には彼はそれをこなし、逞しく健在している。

その理由が、彼の言う「影響を受ける程度の能力」だろう。吸血鬼の姉妹と、賢者の石を操る魔女、そして多くの妖精たちに囲まれて長い時を共に過ごした結果、彼は「吸

血鬼の性質」と「魔女の魔力」の影響を常に受け続けていた。

そうしたことで、彼は人間離れた魔力と、吸血鬼らしい強靱な肉体を獲得し、さらに妖怪の母からはその性質を活かすために必要な鍛錬をつけられた。これで人間離れしない方がおかしいだろう。

「しかし、そうなると困ったな。これから行く魔法の森は、横を通り過ぎるだけならともかく、中に入ると幻覚効果のある胞子を飛ばすキノコが群生している。お前の能力がマインナスに働く」

「そうなんですすよね……。妖力とか魔力は影響を受けて困ることあんまりないんですけど、病気とか毒とかの影響を物凄く受けるのは本当に困ります。どうしましょうか」

「風が吹いていけば俺の「風向きを操る程度の能力」で胞子の飛ぶ方向を変えられたんだが、今はまったくの無風だしな……」

しかも森の中は木々が風を遮ってしまいうため、それなりに強い風が吹かないと森に入ることすらできない。加えて、魔法の森は瘴気で覆われているため、もしかするとその瘴気さえ蓮鳳に「影響」を与えてしまうかもしれない。

さてどうしたものか、と悩んでいると、二人の後ろから声をかける少女がいた。

「あなたたち、こんなところでそんな大荷物もって、どうかしたの？」

「あ、アリスさん。こんにちは。お邪魔でしたか？」

「邪魔ってことはないけど、あなた普段は屋敷に籠もりっぱなしでしょう。こんなところにいるなんて珍しいわね」

アリス。正しくはアリス・マーガトロイド。魔法の森に住む魔女で、気難しい者が多い魔法使いの中では珍しく、人間に対しても割と友好的な人物である。魔法といつても多岐に亘るが、彼女の場合は特に魔法の糸を使って人形を操ることを得意とし、時折その魔法を使って里で人形劇をしている。

長生きすると増えるのは知識と経験だけではなく友人・知人もそれに当たると言う通り、彼女もまた走馬の知り合いである。といつても、彼女は魔女といつても生まれつきではなく人間から修行してなったタイプで、まだ新米の魔女であるため、天狗である彼の知人でありつつも実年齢と外見年齢はさほど離れていないらしい。

紅魔館に拾われてから15年間、一度も屋敷の外に出なかつた蓮鳳にとつて数少ない「屋敷の外の知人」であり、厳密に言えば蓮鳳の知り合いではなく屋敷の図書館に住まう魔女、パチュリーの友人である。つまり、蓮鳳からすれば「姉の友達」に近い関係だと言えよう。

「それに走馬も。サボリ魔のあなたが蓮鳳のお供なんて、いったい何があつたの？」
「こいつのお袋からの依頼だよ。修行と友達作りの旅なら、俺がうってつけだろうってな」

「ああ、確かにこの子、あのまま屋敷にいたら友達なんて一人も作れそうになかったわね……」

うっ、と悲鳴にも似た呻き声をあげながら精神的ダメージを受けている蓮鳳をよそに、走馬とアリスの会話は弾む。どちらも会話に積極的なタイプではないはずだが、アリスは聞き上手で、蒼麻はコミュニケーション能力が高いおかげか、言葉が詰まる様子はない。

ちよくちよく聞こえる軽度の罵声も、日常会話ではよくあることだ。レミリアとフランドールの口喧嘩はもつと野蛮かつ暴力的で、最終的に手が出始めたら屋敷の人員を総動員して止めるほど規模が大きいので、この二人のやりとりは微笑ましさをすら感じられる。

「そういうえば、僕たちも人のことは言えませんが、アリスさんはどうしてここに？」
「どうしても何も、この魔法の森の奥が私の家だもの。……って、ああ、そういうこと。蓮鳳の能力のせいで入れなかったのね」

「お察しの通りです。パチュリーさまの魔力の影響で、おそらく瘴気は問題ないと思うんですけど、キノコの胞子が不安で……」

「ならキノコの群生地を避けながら私の家に行きましょう。家に森の地図があるから、キノコの群生地を書いてあなたたちあげるわ。修行中ってことは、たぶん野宿でもす

るんでしよう？」

「本当ですか！　ありがとうございます！　次に屋敷でお会いしたら、美味しいお菓子ををご用意しますね！」

アリスの提案を受けて、蓮鳳と走馬は一も二もなくそれに食いついた。キノコの群生地を避けられれば、この森の中でやろうとしていた修行はなんだかんだで決行可能だということがわかったのも大きかった。

加えて、久しぶりに知り合いと合えたということも、蓮鳳のメンタルに少くない安心感を与えた。天狗のお供がいるとはいっても、15歳の少年が親元を離れて旅をするとなれば、その緊張はなかなか解れるものではない。まして、ここは妖怪・幽霊・妖精までもがひしめく幻想郷であるのだから、なおのことだ。

アリスの後ろを歩いていき、ところどころ不自然に獣道のようなところを歩かされたのは、そこがキノコの群生地だったからだろう。15分も歩けば、少し開けたところに花壇つきの一軒家。アリスの家である。

「なんとか着いたわね。どこに何があるかわかるとはいっても、実際にあんな道を通るのは初めてだったから、私も少し不安だったのよ」

「じゃあ、そんな道でも迷わずまっすぐ家に着くことができたアリスさんは凄いですね！　僕だったら絶対に迷ってましたよ」

「ていうか、空を飛んでくればその苦労も必要なかったんだけどね」

「空を飛んじやったら修行になりませんかからね……」

魔法の森の中を進むにあたって、あの大荷物も走馬の背を離れて蓮鳳が背負うことになった。障害物となる木々に当たらないように重い荷物を運ぶのは、体力作りとしては古典的ながらも有効的な手段だったからだ。

しかし飛んでしまえば修行にならない。飛んでも重いことは重いのだが、足腰に負担がまったくないからだ。

「じゃあ地図を持ってくるから、そこで少し待っていてもらえる？　蓮鳳、昔みたいに花壇の花を抜いたり、誤魔化そうとして雑草を植えちゃダメよ」

「何歳の頃の話ですか?!」

「あの後その雑草がものすごい勢いで増殖して美鈴に物凄く怒られてたつてパチュリーから聞いたわよ」

（これが幼少時代を知られているがゆえのデメリットか……。俺も椀にこれくらい知られてると思うと……今度からあいつの言うことをもう少しまともに聞いとくか）

じゃあちよつと待ってて、と言って家の中へと消えて行ったアリスを玄関の前で3分ほど待つと、再びスクロールにされた地図を持って戻ってきた。よく見れば、さつきまでは1体だけだった人形が、今は彼女の周囲に5体ほど浮遊している。

聞いてみると、「地図を持ってきた人形」「ペンを持ってきた人形」「お茶をいれる人形」「この後の予定帳をもってきた人形」「なんとなく応援してくれた人形」とのことだった。明らかにアリス一人で間に合う作業のはずだが、魔法も科学も「技術」というものは形の差こそあれども、その根底は「楽をしたい」という人の気持ちから生まれたものだと思います、正しい用途のようにも思える。

「はい、これが森の地図。キノコの群生地と、この時期に多い毒虫が集中している地域を書いておいたわ。あと、野宿するのに最適な少し開けた場所もいくつか記しておいたから、有意義に使いなさい」

「ありがとうございます、アリスさん」

「それと、この森のキノコには食用のキノコもあるけど、パツと見じゃ猛毒のとまったく一緒に見えるものもあるから、キノコはどんな見た目をしてても絶対に手を出しちやダメよ」

「はい。気を付けます」

少し過保護じゃないのか、と思う走馬だったが、基本的に紅魔館のメンバーからは甘やかされて育ってきた蓮鳳はまったく気にすることなく「やつぱりアリスさんは優しいなあ」くらいに思いながら、次に会った時にするお礼をどうするか考えていた。

「今度パチュリーに会ったら、あなたの様子を伝えておくわね。じゃあ、頑張りなさい」

「お願いします。では、本当にありがとうございます」

「もし椀に会ったら、ついでに俺が家に隠してた仕事も代わりにやっといってくれて伝えてくれ」

「伝えてもいいけどどうなっても知らないわよ」

あねさま住職

「ここは……みようれんじ？　つて読むのかな？」

「だな。この住職……女だから尼さんだな。そいつがお前に興味があるらしいんで連れてきたってわけだ。まあそこまで気負わず適当にくっちゃべってこい」

「くつちやべってこいつて……走馬そうまは行かないの？」

「この主……ようはその住職なんだが、そいつとはそれなりに仲がいい方だと思うんだが、反比例するようにその仲間たちからは好かれてなくてな。俺が案内するのは門前こゝまでだ」

そう言うと、走馬はいつものように瞬く間すら与えず飛んでいつてしまった。妖怪の警邏を担う白狼天狗というだけあって、ここで大声を上げれば妖怪の山にいても聞こえるので、迎えに困ることはない。

ならばあととは覚悟を決めるだけ。ふう、と一息ついて門を開け、「お邪魔しまーす……」と呟きながら中に入ると、門の外からも見られた寺の全容が視界に飛び込み、その荘厳な雰囲気は圧倒される。

しばらくそうしていると、くつくつ、という小さな笑い声が聞こえた。さすがに呆け

すぎたか、と恥じながら視線を声のする方へ向けると、そこにはネズミの耳と尾を持つ少女が寺の廊下の手すりに腰掛けながら、今もなお笑っていた。

「すみません、走馬の紹介でこのお寺の住職さんに会いにきました、紅蓮鳳ホンレンファンという者ですが、ご住職は……」

「ああ、君が白蓮の言っていた……。笑ってすまなかつたね。私はこの寺に住む鼠妖怪のナズーリン。よろしく、蓮鳳」

こつちだよ、というナズーリンの後ろに付いていきながら、やはり何度でもこの寺の様子をまじまじと見てしまう。

そもそも寺というものの自体がこの幻想郷では命蓮寺が初めてだということもあるが、それ以前に蓮鳳の見聞が圧倒的に少ない。神社は主であるレミリアが博麗神社というところにしばしば出向くのでどういうところか聞いたことはあったが、寺というものは見たことも聞いたこともない。

前を歩く彼女に「無知を恥じた上で聞くんですが、お寺と神社はどう違うんですか？」と問うと、彼女はまたも少し笑いながら、丁寧の説明をしてくれた。だが難しい話が多すぎて頭に疑問符を浮かべていると、「ようは神様を祀ってるか仏様を祀ってるかの違いだよ」と言われ、ようやく大雑把にだが納得がいく。

「この部屋にいるはずだから、ゆっくりしていけばいい。もう案内もいいだろうし、私は

お茶を淹れてくるね」

「はい、どうもありがとうございます」

また後で、と言つてナズーリンと別れると、蓮鳳は小さな戸を挟んだまま「走馬の紹介で来た者です」と声をかけて、「どうぞ」という返事を待つて中に入った。

戸の向こうは本堂になっており、大きなご本尊の前でにこにこ朗らかな表情を浮かべている女性と、その横で同じように正座をしながら、どこか警戒した様子でこちらを見る虎模様の髪の女性が並んでいた。

蓮鳳はその二人よりも、どちらかという和本尊の大きさと迫力に目を奪われていて、特にその威厳のある雰囲気に対して、穏やかな表情を浮かべる仏様の顔つきに、言い表せない安心感のようなものを感じずにはいられない。

「……すごい」

「おや、仏様をご覧になるのは初めてでしたか？」

「はい。なんていうか……すごい。語彙力ないなあ僕。うーん、なんて言えばいいんだろう。神様とかとは違う迫力があるっていうか、厳しそうな雰囲気と優しいげな雰囲気が合わさってるっていうか……なのはその二つが矛盾しないのが、すごい」

「あなたくらいの年頃でそこまでしつかり仏様の表情や雰囲気を捉えているだけで、十分に素晴らしいですよ。よければ、お参りされますか？」

お参りと聞いて、蓮鳳の様子こそわつく。旅の初日に守矢神社に行きそびれてから、きちんとした神社にお参りに行ったことは今のところない。道の途中で地蔵に手を合わせることはあるが、走馬がそういう「頼ろうとするにはあやふやな存在」を嫌っているせいで、どうしてもしつかりした作法を知る機会がなかった。

しかし今日はその走馬は不在。まして初めてのお寺で、しつかりした作法を知れるとなれば、未知に対して興味津々な蓮鳳のテンションは上がらざるを得ないというものだ。

お賽銭は投げずにそつと入れて下さい、と言われて半銭硬貨をちやりん、と入れる。次はお焼香です、と言われると、そもそもお焼香という言葉自体を今初めて聞いた蓮鳳は頭に疑問符を浮かべる。

彼の困惑する様子に察して、「このお香を三本の指でつまんで香炉に入れてください」と説明すると、蓮鳳はそれに従ってお香をいれていく。

「では、手を合わせてください」

「叩かなくていいんですか？」

「はい、神社と違い、お寺では手を叩かず静かにお参りします」

決して神社の参拝方法がうるさいとか、そういう意味で出た言葉ではないだろう。穏やかな雰囲気からして、他人を貶めて自分側を良く見せようだとか、そういうことが得

意な人には見えないと蓮鳳はなんとなく判断していた。

実際のところ、仏教の敵となる古代の聖人が眠る霊廟の真上に命蓮寺を建てるなど、なかなか強かな一面も持っているのだが、それを彼が知ることはない。

「最後にお線香を立てていただいて、一通りのお参りを終えます」

「えつと……お線香の火は手で扇いで消せばいいですか？」

「はい、口で吹いたりしないようお願いします」

一通りのお参りを終えて、少し感動した様子で目を輝かせていると、いつの間にか戻ってきていたナズーリンから「お茶が入ったよ」と声をかけられて、ようやく我に返る。

この寺の門を抜けてから、何もかもが目新しいものばかりだからだろう。そもそも紅魔館の外というだけで、彼にとつては何もかもが新しく映るだろうが、寺の大きさや雰囲気は他の場所では見られないものだ。

特に信仰の対象となる本尊については、神という形にしがたいものを祀る神社では見ること叶わない。そういう意味で、明確にその対象をはつきりと見られる寺に、彼の興味は尽きなかった。

「さて、ではお参りも済みましたし、自己紹介をさせていただきますましょう。私はこの命蓮寺の住職をしている尼の聖白蓮。そしてこちらが……」

「毘沙門天の弟子で、聖の友人の寅丸星です。今お茶を持ってきたのが私の部下のナズーリン。あなたのことは里で噂を聞いて、こうしてご招待しました」

噂、と聞いて蓮鳳は考えを巡らせるが、そもそも彼は今までほとんど紅魔館の中に引き籠もっていて、知人はたまに図書館に来ていたアリスくらいしかいない。

知人ですらくなく「見たことある人」というレベルまで下げれば、紅霧異変を解決してきた紅白巫女と白黒魔女もそうだが、彼女たちが屋敷を襲撃してきた時は、屋敷の全員から「自分の部屋から絶対に出てはダメ」と言われていたため、彼女らが自分を知っているとは思えない。

となると、噂になるのは旅を始めてからのものだろうが、噂をする人間が集まる場所といえ、人間の里くらいである。里には食糧調達の度に立ち寄ってはいるものの、基本的に野宿をしているので長居したことはない。となると、噂されるようなこともないはずだ。

いよいよ思い当たる節がないと思って唸り始めると、白蓮が口を開いた。

「数日前に、闇妖怪に襲われそうになっていた人間を助けてましたね？」

「ああ、はい。助けたというか、たまたま通りがかったので、闇妖怪に代わりになる食べ物を与えただけです」

「そしてその翌日に、今度は人間に退治されそうになっていた傘妖怪を助けてましたね？」

「はい。あれも助けたというより、暴力沙汰になつたらどつちも怪我じゃ済まなさそうだったのでやんわり論したただけですけど」

闇妖怪の時も、傘妖怪の時も、どちらかを助けたという意識はなかった。

闇妖怪の場合、あのまま人を食つていれば妖怪退治を生業とする巫女に退治されていただろうし、人間はもちろん死んでいた。それを見過ごすのは、同じ人としても、妖怪に育てられた子としても、心苦しいものがあつた。傘妖怪はもつとシンプルで、どつちも危なかつたから止めたというだけだ。

しかもこの場合、噂されるとしたら「人間の味方をしたこと」か「妖怪の味方をしたこと」かによつて、その評価は大きく変わるだろう。実際はその両方に味方していたのだから、察しのいい里の人間はそれに気付いて「半端者」の烙印を押されているのかもしれない。

なににせよ、その「噂」が蓮鳳にとつていいものではないことは、容易に想像ができた。

「里では「人間を助けた妖怪の味方」としてたいへん話題ですよ。一部の血の気の多い者には、それとなく注意をしておきましたが、次に里へ赴くことがあれば気を付けた方がよいでしょう」

「それは……ありがとうございます。でも、どうしてまだ会つたこともなかつた僕のた

めに？」

「人間と妖怪を隔てなく助けるあなたの姿勢が、私の目標とする人と妖怪の在り方に最も近いからです。私は「妖怪を虐げず、人間を傷付けない」ことこそが人と妖怪の理想的な姿だと思っています。あなたは、私がそれを説くまでもなく行動していた。だからあなたとは同志になれると思いました」

妖怪を憐れむ僧侶と、妖怪に育てられた子供。人間として生まれながら妖怪にも味方する二人は、今日初めて出会ったばかりではあるものの、既に同じ信念や志を持つ仲間であった。

まして、蓮鳳にとつて白蓮は妖怪を受け入れる寺の住職であり、お参りの捧げ方を教えてくれた優しいお姉さんでもある。年上の女性に囲まれて育ったせいもあって、彼はお姉さん気質の女性に対して従順である。

共に手を取り合いませんか、という彼女の提案に、彼が首を横に振ることなどできるはずもなく、むしろ同じ考えを持つ者に初めて出会った感動の方が勝っていた。

「じゃあ、これからよろしくお願いします、白蓮さん！」

「ふふ、なんだか弟と接するような気分だわ」

「弟、ですか？ 僕も、なんだかお姉ちゃんと話しているような感じですよ。白蓮姉さま、なんて……」

その瞬間、白蓮の脳裏に最愛の弟、命蓮との記憶がよみがえった。見た目こそ似ても似つかないが、誰にでも平等に優しく、穏やかで、柔らかい笑みと共に誰かを助けようとするその姿勢は、間違いなく弟・命蓮のそれと同じであった。

気付けば、白蓮は蓮鳳の体を強く強く抱きしめていた。二度と会うことの叶わないはずの弟と再会したかのような気分ですらあった。しかし、目の前で狼狽えながら「どうしましたか?」と背中を優しく叩く彼は、命蓮ではなく紅魔館の愛され息子、紅蓮鳳である。

困惑する星や、宥めようとするナズーリンにも寄り添われながら、ひとしきり泣き終えると、ようやく蓮鳳を解放した。

「もう大丈夫ですか?」

「はい。お見苦しいところをお見せしました……」

「いえ。僕が変なことを言ってしまったせいで、ご迷惑をおかけしました」

「いいえ、むしろ「姉さま」と言っていただけただけのおかげで、忘れかけていた感覚を思い出すことができました。ありがとうございます、蓮鳳。もしよろしければ、これから私のことはそう呼んでください」

パチュリー以外に対して「姉さま」と呼ぶのは随分と変な気分だが、今はもう「パチュリーさま」呼びなので、懐かしさを感じるのは自分も同じかと思い、「わかりました」と

返事を返す。

「では、そろそろお昼ですし、よろしければお昼も一緒にいかがですか?」

「お邪魔ではありませんか?」

ちらりと視線を白蓮の横に向けると、ツンと澄ました表情の星が「構いませんよ」と返した。さすがにまだ、この寺の妖怪たち全員に納得されているわけではないようだ。

それもそうだろう。この寺にいる妖怪たちのほとんどは、白蓮に救われたり白蓮の志に感銘を受けて行動を共にしている者ばかりだ。そこに出会ったばかりの人間が来て、彼女に厚意にされては面白くないだろう。

とはいえ、空腹は確かだし、ここから里まではそう離れていないが、走馬を呼んで里に入ると、さすがに長居はできない。どうしても里を出てから自炊することになる。その手間を省けるのは、正直言つてとてもありがたい。

「……では、ご厚意に甘えさせていただきます」

「はい。食堂はこちらです。星、他のみんなも呼んでご飯にしましょう」

「……わかりました。ナズ、行きましょう」

「はいはい。……ヤキモチはもう少しバレないように焼くんだね、ご主人様」

聞こえるか聞こえないかギリギリのところながらも、すっかり耳に入ってしまったナズーリンの言葉を聞いて、内心「ああ、やっぱり妬いてたんだ……」と項垂れる蓮鳳で

あつた。

花妖怪のいたずら

幻想郷巡りを始めてから、蓮^{レンシヤン}鳳が最初に体験した致命的危機といえ、やはり今日この日この時、目の前に立つ「彼女」に出会ったことだろうと、走馬^{そうま}は口にする。なぜ本人ではなく走馬が断ずるのかというと、本人は和やかな雰囲気で「彼女」と接していて、それを危機と思っていなかったからだ。

妖怪というものは、多くの場合それぞれの「縄張り」を積極的に移動しようとしないう性質を持つ。人間と同じものを食べられるといっても、人喰い妖怪も少なくないし、そうした者たちには妖怪の賢者が「食べてもいい人間」を与えているせいで、わざわざ縄張りを離れて人を襲う必要がないのだから、なおのことだ。

ただ、それでも縄張りを離れて人間の里に現れる妖怪というのも、決してゼロではない。それらが里の人間を襲えば、当然ながら幻想郷の妖怪退治の専門家である「巫女」に退治されてしまうのだが、人を襲うために里に出入りしているわけではなく、あくまで店や人に用事があったて来ている、というのがほとんどだ。

そして、「その時」蓮鳳と走馬が出会ってしまったその妖怪は、そうした「気まぐれに里に現れる妖怪」の中では最悪にして最強とも言っているレベルの妖怪——「花妖怪」の

風見幽香であった。

「ぶつかってしまつてごめんなさい、お姉さん。お怪我はありませんか？」

「いいえ。ただ、今日は人混みが多いみたいだから気を付けた方がいいわ。その花も、潰れてしまつては台無しでしょう？」

「たしかに、せつかくいいバラを見繕つてもらいましたし、渡す前に悪くなつては大変ですよね」

「ピンクのバラは感謝の贈り物ね。十三本ということは……恋人というよりも親しい友人へのものかしら？」

「はい。最近出会つたばかりのお友達へ。お姉さん、花に詳しいんですね。お花屋さんで花言葉は聞きましたけど、本数はお任せだったので、意味があるなんて知りませんでした」

穏やかな雰囲気では話をする蓮鳳と幽香の二人を目にしながら、走馬は内心かなり焦つていた。花妖怪の幽香といえば、スペルカードルールにおいてはさほど強敵というわけではないものの、純粋な妖怪としての力はトップクラスだ。

人間に対する好感度はほとんど最低値と言つても過言ではなく、人間を積極的に襲おうとしないのは「嫌い」と「無関心」が彼女の中でほぼ同義であるためであつて、少なくとも人間に親しみや愛おしさなどは微塵も感じていない。

今こうして蓮鳳と話しているのも、その性格が穏やかであるためではなく、あくまで蓮鳳を「格下」と見下しているせいで、彼女にとつて「わざわざ巫女と対峙する面倒を冒してまで手を上げるのが無意味なほど矮小な存在」だからこそ、その態度に余裕が表れているだけなのだ。

こうした態度を取る妖怪は総じて自分の実力に絶対的な自信を持つ強力な妖怪に多く、その実力に比例してプライドも高い。だからこそ、「余裕が表れている内は無難だが、プライドを傷つけると容赦なく襲ってくる」者がほとんどである。

幸いにして、蓮鳳は他人を不用意に煽るような性格ではなく、それでいて自分を偽ったり無暗に謙へりくだつているわけでもないのです、よっぽど他人を不愉快にさせないのが救いだろうか。

「花に限らず、意味を持たないものなんて多くないわ。意味のないものは「生まれる意味」もないもの。言葉も、物も、命も、すべてのものには何かしらの意味を持って生まれてくる。できれば、次に花を買う時はその意味を理解してあげなさい」

「はい。じゃあ、僕はこの辺で……って、走馬？ 顔色があんまりよくないけど、どうかしたの？」

「い、いや……」

「——走馬？ あら、チンピラ天狗の走馬じゃない。あなた、とうとう妖怪の山を追い出

されて人間のお守り役になったのかしら」

幽香はまるで「今気づいた」とばかりに走馬へ視線を移すが、彼女ほどの妖怪が下端とはいえ幻想郷でもトップクラスの妖怪である天狗の気配に気づかないはずもなく、白々しい態度で口元を歪めるその様子は、まさしく不気味さと厭らしさを兼ね備えた「妖怪らしい妖怪」のそれであつた。

事態を呑み込めず不思議そうに二人へ視線を行ったり来たりさせる蓮鳳は、幽香が少し手を伸ばせばすぐに届く距離にいて、いくら俊足の走馬でも、彼が蓮鳳を奪還してこの場を逃げ出すのと、彼女が蓮鳳の首を刈り取るのでは、明らかに後者の方が早いだろう。

不良天狗の走馬は、その性格ゆえに敵も味方も多く作りやすい。多くの知り合いから「友達想い」と評価される裏には、友達でない相手に対する冷酷さや冷血さを表している面もないわけではない。そして天狗としての長い人生の中で、幽香という人物は彼の「友達」ではなかつた。

明確な衝突こそ今まで一度としてなかつたが、それは彼女と会つたことがないこととイコールではない。今までも宴会などで顔を合わせたことはあるし、なんなら何度か言葉を交わしたこともあるが、そのどちらにおいても走馬は彼女に対して好印象を与えるような態度をとつたことはない。

だからこそ、今このタイミングで出会ったことは最悪と言えた。「自分が大切にしているもの（≡友人）と一緒にいる時に出会った」「友人が幽香の危険性を知らなかった」「友人が基本的に性善説を信じていて他人を積極的に疑わないタチだった」と、そのどれもが今この状況にとつて悪い影響を与えていた。

「別に追い出されたわけじゃない。知り合いの息子だから付き合ってるだけだ。そうじゃなきゃ人間なんかのお守りなんかするわけないだろ」

「走馬……?」

「そう。まああなたみたいなタイプに天狗の社会は合わないでしょうし、抜け出すにはいい言い訳ができたんじゃないかしら」

今まで見たことがないような切迫した表情で幽香を睨みつける走馬を見て、蓮鳳はやや怯えたように彼を見つめる。どう考えても普段の素っ気なくも友達想いな彼の態度ではない。どうにか落ち着かせようと声をかけようとする蓮鳳に被せるように、幽香の言葉が先んじる。

「でも……だとすればなおのこと興味深いわね。今まで妖怪の友人しか作らなかつたあなた、人間の友人に付き合うだなんて。せっかくだし、私もちよつかいを——」

「友人なんかじゃないッ!」

「——ッ!?!」

「さつきも言ったろ。こいつは知り合いの息子であつて、それ以上でもそれ以下でもない。ただの人間よりも距離が近いのはこいつの親との付き合いが長いからだ。別にこいつに対して親しさなんて微塵も感じちやいねえ。旅のお守りさえ終わればそれでおさらばだ」

今まで蓮鳳には一度として見せることのなかつた、白狼天狗としての冷酷で冷血な一面。外敵に対する排他的で見下すような視線を向けられた蓮鳳が、一步後ずさる。

いつもの走馬ではない。蓮鳳の知る春海走馬という人物はこんなことを言うような者ではない。だがそれでも、蓮鳳とて彼の全てを知るわけでもない。むしろ、彼のことを知っていることの方が多くない。今こうして向けられる視線ですら、今初めて知つたのだから、当然といえば当然だろう。

だがそれでも、自分の知る走馬を、自分の信じる走馬を疑いたくはない。そう思つて彼をまっすぐ見れば、彼の拳が固く握られて震えていることに気づいた。「無理をしている」——そう気づくのに時間はかからなかつた。

だとすれば、彼が何よりも大切にしている「友人」に対して「友人なんかじゃない」とまで言わせる要因はすぐにわかつた。今こうして自分の肩を撫で抱くように手を当てている女性——風見幽香の存在が、彼に「それ」を言わせているのだと。

「あら、そう？ だつたら、それはそれでいいじゃない。ちようどお茶汲みの人間が一人

くらい居てもいいと思つてたの。だからこの子、少し私に貸してくれないかしら？」
「それは俺の一存じゃ決められないな。そいつは俺の持ち物じゃなくて俺の知り合いのものだからな」

「なら、後で私から「挨拶」に行くから、あなたがその知り合いに言つておきなさい。じゃあ、借りるわね——」

「待てッ！ 茶くらいなら俺が汲んでやる。俺が天狗社会に馴染んでないのはお前だつて知つてるだろ。俺がお前んちに入り浸ろうが不審がる奴なんていない。そんなヒョロいガキより、俺の方が玩具としても遊び甲斐があんだろ！」

必死に引き留めようとする走馬を見て、一瞬の間を空け、幽香はおかしそうに笑い始めた。

「くすくす、あなたがそこまで必死になったところ、初めて見たわ。いつも仏頂面で生意気なあなたのその態度から、いつかその余裕を奪つてみたいとは思つていたけれど、まさかこんなに簡単にそれが叶うなんて思わなかったわ」

「うるせえ、俺のことなら好きに言つて好きにしろ」

「ふふつ、そうね。じゃあ今日のところは見逃してあげるわ。面白いものも見えたし……私に命を握られてなお、そのバラを落とさなかったこの子に免じて、ね」

その胸に抱くバラを見て、幽香は満足げに笑う。さつきまでの厭味を含んだものでは

なく、心から溢れた喜びを隠し切れないような、そんな笑顔に、蓮鳳はどうしても彼女を嫌えなかった。

今こうして走馬を苦しめているのは間違ひなく幽香だ。だが、彼女の花へ向けた優しさもまた間違ひなく本物だ。その優しさが人間や妖怪に向けられていないだけで、それを悪だとは言ひ切れない。人によって価値を見出す対象が異なるのは、本好き姉・パチュリーからも教わった。

大切なものが必ずしも「誰か」である必要などない。意思なき「何か」や命なき「何か」であつても、そこに向けられる愛が本物であるのなら、その人にとって最も価値のあるものを否定することは誰にも許されない。

「お姉さん、さつき花の本数によつて意味が違つて言つてましたよね」

「ええ。あなたが今持つている十三本は「永遠の友情」ね。友人に送るなら、それが一番いいと思うわ」

「じゃあ、初めて出会つた相手に渡すには、何本がいいんですか？」

「初対面の相手なら……：そうね、それが恋なら一本が「一目惚れ」、三本が「告白」、十二本が「付き合つてください」、あと……：恋じゃなく単純に出会いへの感謝とかなら五本が「出会えた喜び」ね」

幽香からそれを聞くと、蓮鳳は持つている花束から五本のバラを取り、幽香に渡した。

「お姉さん、走馬の知り合いなんですよね。だつたらきつと、悪い人じゃないと思うから。これからも出会つたら声をかけさせてください。そして、よかつたらもつと花のことも教えてください。僕、まだまだ知らないことばかりなので」

邪気のない彼の笑顔に、幽香は毒気を抜かれたように肩を竦める。

今しかない、と走馬は蓮鳳の手を引き、彼を自分の背の後ろへと隠した。

「……走馬。あなた面白い子の世話をしてるのね」

「そのせいで苦勞も絶えないけどな」

「でしようね。その無垢さは無知の証でもあるわ。早々に改めさせた方がいいわね。でも……そうね、次に会つた時は世間話くらいにしておきましょう。その氷の結晶のように綺麗で儂い心が汚れない内は、手を出さないであげるわ」

じゃあ、さようなら、と言って幽香がその場を後にすると、走馬は蓮鳳の袖を掴んだままその場に膝をついた。

「走馬！」

「蓮鳳……さつきは悪かった。本心じゃないとはいえ、お前のことを友人じゃないなんて——」

「そんなことわかつてる！ 僕はまだ走馬のことあんまり知らないけど……それでも走馬が嘘つきで友達想いなことくらい知ってる！ きつと僕のために嘘をついてくれた

んだよね。ありがとう……それと、ごめんね」

きつと、走馬にとつて最も言いたくない言葉だったのだろう。嘘つきというものは総じて、言葉の意味をよく知っている。幽香も言っていた通り、あらゆるものには「意味」がある。言葉というものは、そういう「意味」を最も強く表現する。

だからこそ、友達想いな彼がその友情を裏切るような「言葉」を吐くことは、彼という人物のアイデンティティを崩壊させるほどの意味が込められているはずなのだ。それなのに、彼がそれを躊躇なく口にしたということは、それだけ切迫した状況が今しがたまで迫っていたということ。

幽香のことを嫌いにはなれないが、それでも走馬に「それ」を言わせたことだけは、蓮鳳の胸にゆらゆらと薄暗いものを燻ぶらせた。

「謝んな。お前はいつもみたいに妖怪も人間も区別なく接しただけだ。お前はそれでいい。知識や経験なら後からいくらでもつけられる。けど妖怪や人間への純粹な想いや偏見のない視点つてのは一度曇るとよっぽど戻らない。だからお前は、なるべくお前らしくいればいいんだ」

「うん……。ありがとう、走馬」

永遠亭の薬師

幻想郷を巡る旅もしばらくの時を経て、見聞を広げていく蓮鳳レンフウであったが、それと同時に自らの肉体と技の鍛錬も怠つてはいなかった。

未だ道の整備が十分でない山道などは足腰を鍛えるのに格好の場所だと、蒼麻に預けている荷物を背負いながら大股歩きをして足腰の鍛錬に励み、ある程度の高さがある山に登れば、「影響を受ける程度の能力」によつて酸素の薄さによる息切れが激しくなっていくため、動きながら呼吸を整える鍛錬に向いていた。

ただ、やはり「影響を受ける程度の能力」は、走馬が想定していた以上に不都合の多い能力でもあった。周囲の妖力・霊力・魔力・瘴気など、明らかに想像が容易いものなら予防ができる。しかし、ウイルス・病原菌・気候・環境による影響は、さすがに意識も感知もしづらい。

里の中で流行っている病くらいなら、その噂を逸早く届ける天狗のネットワークによつて走馬の耳にも入るが、さすがに道端で野垂れ死んでいる野生動物が微生物や肉食の虫によつて食われ、腐敗した肉から発せられた病原菌などは予想もできないし、気付いた時にはもう足元にあつたりする。

つまり、何が言いたいかと言えば――。

「ごめん、走馬……」

「うるせえ！ 謝つてる暇があつたら寝てろ！」

以前見かけた毒妖怪、メデイスン・メランコリーの縄張りである鈴蘭畑の横を通り過ぎる際、走馬はスズランの毒が蓮鳳に影響を与えぬように風向きを変えていたのだが、こちらに気づいたメデイスンが近づいてきてしまい、彼女の身体に染み付いた毒にやられてしまった。

さすがに悪意なく毒を撒いてしまったというのはメデイスンにとつても本意ではなかつたようで、すぐに蓮鳳から離れて謝っていたが、蓮鳳は意識をギリギリで繋ぎ留めながら、息も絶え絶えに「君のせいじゃないよ。ごめんね」と言つて倒れてしまった。

いくら天狗といつても、二人分の荷物を背負つたまま一人を担いでしまえばスピードが落ちる。走馬は荷物をメデイスンに預けると、すぐさま蓮鳳を背負つて迷いの竹林の奥――薬屋「永遠亭」へと向かつた。

「ごめん走馬、吐くかも……」

「服なんざ後で洗えば済むんだからさつきと吐け！」

幸い、ここは竹林の真上。下にいるのは野生動物か迷い人くらいで、吐瀉物を撒き散らして文句を言う者はそう多くはない。

さすがに走馬の服を汚してしまうのは、と思いなながらも、下に降りて吐ききるのを待っていては毒が全身に巡ってしまう。メデイスンの操る毒はスズランに限らず多彩ではあるものの、体に染みついているとすればスズランのものだろう。

だとすれば、潜伏から発症までは一時間。しかし蓮鳳の能力によつて「めまい」「頭痛」は即座に発症し、五分と経っていない今「吐き気」まで出ている。スズランの毒で一番怖いのは「心臓麻痺」だ。そうなる前に、永遠亭に辿り着かなくてはならない。

「……見えた！　もう少しだ！　気張れよ蓮鳳！」

返事はない。一瞬、嫌な予感が過るが、神経を集中させてみれば、まだ背中には蓮鳳の鼓動が伝わってくる。少なくとも、心臓麻痺ではない。まだ生きている。

走馬は『幻想郷最速の天狗』にすら追いつくと言われたそのトップスピードで、視界に捉えた永遠亭の玄関前へと着地し、その戸を叩いた。

「永琳！　おい永琳！　ここを開けろ！」

「はいはい、今開け……つて、走馬？　貴方がそんなに慌てるなんて珍——」

「世間話してる暇はねえんだ！　すぐにスズランの毒に効く薬をくれ！」

普段の飄々とした態度をとる走馬がこうも慌てる様子が物珍しいのか、永琳は彼が背負う急患の顔を一瞥すると、「こっちに運びなさい」と言つて奥へと通した。



「ひとまず落ち着いたわね。しばらく休ませておけば、そのうち目を覚ますでしょう」
「……そうか」

永琳によれば、もうあと数分遅ければ手遅れになっていたというほど、蓮鳳の容体は良くないものであったらしい。しかし同時に、スズランの毒がこんなにも早く巡ることは普通ならあり得ないはずだと、走馬に問い詰めた。しかし走馬から聞いた蓮鳳の能力を聞くと、彼女は納得したように頷く。

影響を受ける程度の能力。もつと言うなら、周囲の影響を必要以上に受け、それに近づく能力。この能力の重要なところは、後半の「近づく」というのが、前半の「影響を受けすぎる」能力によって体が耐えきった後で発動するという、二段階に分けられた一つの能力だということ。

吸血鬼の妖力や、魔女の魔力は、それ自体に悪影響を及ぼすものはない。だからこそ、蓮鳳の肉体は吸血鬼のような頑丈さと、魔力の膜による瘴気の無効化を可能にしている。

だが毒や病原菌のような、影響を受けることが命そのものを脅かすようなものであれば、それに「近づく」前に死んでしまう可能性を秘めているという。だが、それは逆に

言えば――。

「今後、彼はスズランの毒では死なないでしょうね」

「どういうことだ？」

「貴方の話によれば、彼は「影響を受け続けるとそれに近付く」と言っていたそうね。でも、さつき彼の身体を調べてみてわかったわ。彼はもう、スズランの毒そのものに「近付いて」いる。もつと簡単に言い換えるなら、彼は「人間」でありながら「スズラン」という植物そのものに近付いている」

「……そうか。こいつの能力はこいつ自身が勘違いしてるだけで、「影響を受け続けるとそれに近付く」んじゃないか」

つまり、彼が影響を受けて変質する条件とは、その影響を受けた「時間」ではなく、受けた「濃度」――つまり質によるものだ。

紅魔館では、レミリアを筆頭として彼の保護者たちが彼に対する悪影響を懸念して、幼い頃はほとんどその妖力を隠して接していたらしい。しかし、彼の能力が「影響を受け続けるとそれに近付く」ものだとなかった辺りから、徐々にその隠していた妖力や魔力を戻していったという。

そして最近ではレミリアとフランドールあたりが「レンも吸血鬼にならない？」と、積極的に妖力をぶつけていたらしいので、彼の身体の頑丈さや、人間にしては発達しすぎ

た犬歯などから、随分と吸血鬼に「近付いて」いるのだとわかる。

「貴方たちはこの能力を「近付く」と表現しているから、わかりにくいんじゃないかしら。私の予想が正しいなら、彼の能力の本領は、能力そのものが彼の意志とは別のところで独立しているということだと思おうわ」

「独立している？」

「ええ。「影響を受けて、それに近付く」ではなく、「自分が受けた影響を能力が学習し、それに対する免疫や抗体を作る過程で、その影響元に近付く」というのが、彼の能力の正体よ。だからこそ、彼はその影響を深く受けるほど、命の危機に近付くほど、その原因に近付きやすくなる」

とはいえ、いくらスズランに近付いたとはいっても、それはスズランの毒の影響を受けないで済んだというだけで、彼がスズランの毒を操れるようになったわけではない。

吸血鬼に近付いた時も、魔女に近付いた時も、それは同じだった。吸血鬼のような頑丈な体と鋭い牙は得られても、血を吸うことはできないし、魔女のような膨大な魔力を得て瘴気を無効化できるようになっても、魔法を使うことは出来なかった。

永琳の言う通り、影響を受けてそれに近付くのは、あくまでその影響元に対する「免疫や抗体」を作るための過程であって、決して影響元そのものになるためのものではない。とはいえ、さすがに寿命は普通の人間より長くなっている可能性は高いが。

「……まあ、小難しい話はこのくらいにしておきましょう。ここからはさつきできないかった世間話。まさか、あの「自由気まま」を天狗の形にしたような貴方が、人間の子を背負ってあそこまで狼狽している姿が見られるなんて……長生きはするものね」

「自分の注意不足で友人が死にかけたら、そりゃ慌てるだろ。ましてや、こいつは人間だからな。普通の人間より頑丈なだけの、普通の人間より脆弱な人間だ」

「普通より頑丈で脆弱、というのは……確かに比喻でもなんでもなく、言い得て妙というものね。そこらの妖怪と争うだけなら、軽い怪我で済みそうなものだけけど、病に冒されれば子供よりも脆い。……意外と厳しいのね、あの門番の「教育」は」

「ま、そのために俺をつけたんだろうが……なのに、俺はその役目を果たせなかった。友人を……大事な人の子を、守り抜けなかった……」

悔しげな瞳を落としながら、眠る蓮鳳の額に冷たい手を当てる。

「……そう、ま……」

「蓮鳳……。布団で寝るのは久しぶりだろう、ゆっくり休めよ……」

寝苦しかったのか、蓮鳳は体勢を横向きに変えると、体を丸めて走馬の手を両手で握り締めた。

「友人というよりは……可愛い弟分、といったところかしら？」

「弟か……。それも悪くないが、やっぱりこいつは友人だよ。手のかかる友人だ。つたく、

落ち込んで暇もねえな」

「あら、それもまた意外ね。もう少しへこむかと思っていたのだけど」

「へこむ暇があったら、こいつをちゃんと守ってやるための方法を考えてた方が建設的
だろ」

いくら走馬でも、次がない、とは言い切れなかった。



「永琳さん。そして永遠亭のみなさん。本当にお世話になりました！」

「こちらこそ、あなたの能力はいろんな薬の開発にずいぶんと役立つてくれたわ。できれば、次は病気じゃない時に会いたいわね」

「はいっ！」

「いや、こいつすげー綺麗な言い方してるけど、しれつとお前の細胞やら遺伝子やらを奪って研究材料にしたって言ってんだぞ。もつと警戒しろ」

とはいえ、永琳の言う通り蓮鳳の能力は医療にとつて夢のような能力のひとつでもある。能力と肉体が密接に関係する蓮鳳の「影響を受ける程度の能力」は、体組織の一部をサンプリングすることで、その能力の仕組みの一部が把握できたと彼女は断言した。

つまり、彼女の言う「能力が独立した状態」というのは、『蓮鳳の肉体と能力は一体化しているが、能力と意識が剥離している』という意味であることの裏付けでもある。

そしてあらゆる影響——この場合は病原菌やウイルスに対して、それを肉体が耐えきれれば必ずそれに対抗するための「抗体」や「免疫」を作れるという、いわゆる「死ななければあらゆる病気に対するカウンターがとれる肉体」という意味であり、それは全ての医療従事者が血眼になって求めるものでもあった。

「でも、永琳さんのおかげで僕の能力についても理解が深まりましたし、もうスズランの毒を受けないなら、直接メディスンちゃんに謝りに行けます。それがわかったただけでも、本当に嬉しいです。ありがとうございます」

本人以外の誰も意外にしていたことといえば、蓮鳳が今回、一番気に病んでいたのがメディスンの目の前で倒れてしまったことだろう。

事情を知っている走馬たちから見れば、あの時は誰に責任があるとも言えない状況だった。メディスンは蓮鳳の能力を知らなかったとはいえ不用意に人間に近付いてしまったし、走馬は風向きにさえ気を付けていればとメディスンから目を離していた。そして蓮鳳もまた警戒心が薄すぎた。

だが、蓮鳳にとっては「自分の能力への認識の甘さから、メディスンが近付いてきたことに気付いてもすぐに逃げようとせず、結果的に彼女の目の前で倒れて罪悪感を与え

てしまった」という状態だった。

もしも自分が「スズランに近付いている」ことと、その理由を永琳から聞かされていなければ、メデイスンに謝りにいくことすらできなかった、というのが彼の言い分であつた。

「じゃあ、僕たちはこれで」

「だな。まずはどこに……って、まあお前は決まつてるよな」

「うん。ひとまずは鈴蘭畑だ。荷物も置きっぱなしだし、何より彼女の罪悪感を放つておけないよ」

気法―風切りによつてふわりと宙に浮きあがると、前を進む走馬の背を追つて、蓮鳳は永遠亭を後にした。

「ただいまー」

「あら？ 輝夜、今日は随分とゆっくりしたお帰りでしたね」

「あなたたちこそ、こんな玄関先でわざわざお出迎えなんて……誰か客人でもいたの？」

「ええ、あの不良天狗の走馬が、友人を連れて」

「……………ふーん？」

白狼天狗の白黒の記憶

蓮鳳と走馬の旅を始めて長らく時を重ねたが、この日は珍しく人間の里で宿を取るこ
とになった。普段なら食料や消耗品の買い足しをすればそのままさつさと里を出てし
まうのだが、この日ばかりはそういうわけにもいかなかった。

博麗大結界によつて外界と隔たれている幻想郷だが、三六五の暦を辿れば一年を巡る
ように、四季や天候も当然ながら訪れることになる。さすがに、そのタイミングまで外
界と同じということはないが。

つまりは、今日からおおよそ数日に亘つて、年に数度の大嵐が訪れる日なのだ。これば
かりは、屋根すらない場所野宿というわけにはいかない。ただでさえ蓮鳳は周囲の影
響を受けやすい能力を持っているため、体を冷やせば抵抗力が弱まり高熱を出す。

よつて、今回こうして早々に里入りし、宿で保存食を齧りながら久しぶりの休息とい
うわけだ。

「普段は野宿で寝るにしても体を痛めやすい。今日は外に出なきや自由にしている。明
日以降は外の様子次第だが、屋内で出来る修練をするぞ。身体を動かすだけが修練じゃ
ないしな」

「わかった。……けど、なんかすぐく見られてない？ 僕たち何かしたつけ……？」

久しぶりの宿、とは言うが、二人の旅において路銀稼ぎは容易ではない。帰る場所はあるけれども、旅をしている間は根無し草に等しい。それでも食料と消耗品を保っていられるのは要り様の直前に里の依頼を受けて妖怪退治（という体で追い返し、命蓮寺で保護）しているからだ。

特に、その性質上「殺す」ことができない妖精の類は格好の稼ぎ相手である。他の妖怪であれば、「なぜ退治したのにまた来るのか」「殺し切らなかつたのか」と非難を受けることも少なくないが、妖精はそもそも死なないので「退治したのにまた里に来る」ということに誰も違和感を感じない。

加えて、妖精は力が弱くいたずら好きである。人間でも妖怪退治を生業とする者なら対処できないこともなく、そして懲りずに何度もいたずらをしようとするため、定期的に対処する必要があるため決して依頼が途絶えることがないのだ。

本来なら里で妖怪や妖精が起こす事件は博麗の巫女が対処するはずなのだが、妖精のいたずら程度は茶飯事である上、それなりに知恵と腕が立つ者なら十分に対処できることもあつて、事態がよほど大きくならなければ博麗の巫女はノータッチである。

おかげで稼ぎはそこそこにあつたが、さすがに普段は野宿とあつて、こうして宿に泊まるのは予定外の出費であり、一番安い雑魚寝用の大部屋がせいぜいであつた。

「あの子供、最近よく聞く天狗の連れ人ってやつか？」

「みたいだな。あの春海走馬とつるんでるあたり、あいつもよほどの変人だろうよ」

「それか、春海走馬はああいう女顔の野郎が好みなのかね」

全ての目が悪意に染まったものではない。単純な好奇心や、あるいは天狗に拐わかされた子だと憐れむ者もいた。しかし、悪意ある声というものはどうしてもその声が大きくなりがちだ。聞きたくなくても、その耳に届いてしまう。

中には、彼の長く美しい紅蓮の髪と、あどけなさの残る童顔に女性的な部分を見出して、あろうことか走馬にありもしない性癖を押し付ける者もいた。とはいえ、天狗に限らず格の高い妖怪は人間の魂や心に価値を見出し、結果として同性を番いにもすることも無いわけではないため、走馬もそれ自体を否定することはしなかった。

だが、問題は明確な悪意を向けられた蓮鳳であった。悪意は周囲の不安を煽る。そして不安とは他者の「心」に影響を及ぼす。家族や走馬をはじめとして、今まで出会った人々からは概ね好意的な感情ばかり向けられていた蓮鳳にとって、ここまで露骨な悪意に晒されるのは初めての経験であった。

そのせいだろう。蓮鳳はそのままふらりと倒れ込み、走馬は咄嗟に彼を受け止めると、そのまま荷物を枕にして毛布を掛けた。

「……やろうと思えば、お前に向けられる「風向き」を変えてやることもできないわけ

じゃない。けどな、蓮鳳。これから先、こんなことはいくらでもあるぞ。みんながみんな、お前に優しいわけじゃないんだ。だから、これからは心も鍛えていかないとな」

走馬はまるで我が子を愛でるかのように蓮鳳の頭を優しく撫でてやると、そのままゆつくりと視線を上げ、彼の噂話をしてきた者たちを敢えて言葉で責めることはなく、ただ怒気を込めて睥睨する。

ひつ、という蓮鳳よりも遙かに女々しい悲鳴を上げた男たちは、そそくさと部屋の隅に場所を変えると、こちらに背を向けて毛布を被ってしまった。蓮鳳の精神的な成長を促すためとはいえ、友人にこれほどの不安や恐怖を植え付けられて黙っていられるほど、彼は薄情ではないのだ。

「……お母、さん……」

「まったく……。甘えたな性根は治らず、か。紅魔館の奴らは別にお前が憎くて放り出したわけじゃないのはわかってんだろ。お前が大事だからこそ、お前の友達を増やしてやろうと思って、断腸の思いで俺に預けたんじゃないか。たくさん友達作って帰って、美鈴にめいっぱい褒めてもらいたいんだよ」

蓮鳳がこうして母・美鈴を寝言で呼ぶのはこれが初めてではない。むしろ、共に野宿をしていて、彼の寝言から母を呼ぶ声を聞かなかった日の方が少ないくらいだ。それほどこに、紅魔館に居た頃の蓮鳳にとって美鈴の存在は大きかったのだろう。

幼い頃に紅魔館の門前に捨てられ、美鈴の息子として彼女の愛情を一身に受けて育ち、徐々に他の紅魔館メンバーにも愛されるようになって、物心がつく時には紅魔館の末っ子扱いであった。

そして幼いながらに身体が出来上がってくると、母によって門番見習いとしての修行を付けられるようになり、ゆくゆくはフランドールの従者となるべく家事や立ち振る舞いのマナーも躰けられた。

美鈴は強く厳しく、優しい母であった。彼女に憧れて伸ばした烈火のような紅蓮の髪は、蓮鳳の自慢の一つでもある。元々の髪は黒かったと母から聞いたが、彼と最も長い時間を、彼に最も近い場所で共にいた美鈴の妖気に中てられ続けたことで、徐々に髪色が彼女と同じものになっていったのだという。

「あーっ！ やっぱりここに居ましたね走馬！」

「げっ、椛……。とりあえず静かにしてくれ、蓮鳳が寝てるし他の客もいる」

不意に大衆部屋の戸の向こうから聞こえたのは、さすがにもう聞き間違えようのない同僚の声。やっぱり、と言うあたり、走馬がどこかしらの宿に泊まっていること自体は、彼女の持つ「千里眼」の能力によってバレていたのだろう。

椛の方も、蓮鳳には視線が行っていなかったのか、しまったという様子で口元を押しさえると、静かに走馬に近付き、落ち着いた様子で彼に語り掛けた。

「旅の途中で里や山で休みが取れそうな時は、山の哨戒任務に戻る約束だったはずですよ」

「わかったわかった、少し休んでただけだろ。今からそっちに行くよ。けど今は蓮鳳の調子があまり良くないしな……お前この後は？」

「走馬と交代で休憩になりますけど、それでも数時間だけです。ずっとは見ていられますよ」

「それでもいい。ならこの宿じゃなくて山に行つて、俺んちで寝かせておこう。そこで休憩中だけでいいからこいつ見ててやつてくれ。一人でここに居させるよりはいいだろう」

能力によるものか、「影響を受ける」ことによつて眠つた蓮鳳は、その影響に身体が馴染むまでほとんど目を覚ますことがない。とはいえ、今回の影響元は一時的かつ限定的な悪意に中てられただけであり、この影響を受けたところで蓮鳳が悪意ある人物になるということはないだろう。

そもそも、この能力によつて「影響元に近付く」ためには長期間あるいは重度の影響を受ける必要がある。蓮鳳にとつて幸か不幸か、今回の「悪意」は彼にとつて毒にも薬にもならない結果となるだろう。

走馬は椗に二人分の荷物を任せて蓮鳳を抱き上げると、そのまま大衆部屋を出て宿の

女將に宿泊の取りやめを伝えて外に出た。

空はごうごうと暗雲と稲光が立ち込め、しとしと小雨も降り始めている。のんびりしていれば雨風に体を冷やした蓮鳳が風邪をひくかもしれないと、上着を被せて一目散に妖怪の山へと飛んでいく走馬を、後ろから追う椀が文句を言いながら追いかけてきていた。

「待て！　ここから先は天狗の——つて、なんだ走馬か。その懐の人間が最近お守りしてるつていう人の子か？」

「ああそうだ。けど悪いな、今ちよつと急いでるんだ。こいつを家に置いたらすぐ任務に戻るから、悪いけどさっさと通してもらおうぞ」

「あいよー」

山に入る直前、同僚の白狼天狗に何度か声をかけられたが、さすがに白狼天狗における最高戦力とだけあって、彼が人間を連れて山に入ると言っても、それを止める者はいなかった。

そもそも、彼の友人想いな性格については、その友情がどんな種族の垣根も越えて無差別に適応されることの方が、天狗社会では有名であった。だからこそ、彼がその腕に人の子を抱えていることに違和感を持つ者が居なかった、というのも大きいだろう。

「久しぶりだな、このボロ小屋も」

「はあつ、はあつ……!」

「何はあはあしてんだ椛、発情期か?」

「それがあなたたちの荷物背負ってきた相手に言う言葉ですか!」

走馬の速力は「幻想郷最速」と名高い鴉天狗にも追い続けるほどで、少なくとも白狼天狗においてはそれ以下を大きく突き放しての単独トップである。少なくとも椛の全速力であっても走馬の慣らしにすら追いつかない以上、彼女がこの悪天の下で息を切らせているのも致し方のないことであろう。

ともあれ布団を敷いて蓮鳳を寝かせると、走馬はそのまま哨戒任務へと発つていった。留守と蓮鳳の面倒を任された椛は、まだ食事の時間には遠いだろうと、彼らの荷物を一度出しておくことにした。

普段の遣り取りが激しいとはいえ、なんだかんだ幼馴染の腐れ縁というだけあって、荷物の何をどこに仕舞えばいいかくらいは把握している。食品や衣類、薬の類はひとまず鞆の横に出しておいて、道中使いどころのない土産の品や貰い物などは、適した場所に片づけていく。

すると、どうやら財布だけが荷物の中に見つからなかったようで、衣類を確認していると、蓮鳳を寝かせる時に脱がせた上着の中にそれは残っていた。少なくとも、盗人にさられたというわけではないようで一安心していると、その財布から何かが床に落ち

た。一見してみると、紙のような何かが四つ折りにされているように――。

「手紙……いや、写真ですかね？ あの走馬が旅にまで持つていくような写真なんてありませんでしたっけ……？」

それは決して悪戯心ではなく、好奇心と呼べるほど何か思うところがあつたわけでもない。ただ、落ちたものが写真で、拾いついでに開いてみただけ。そんな、自然な動作の流れに違いなかった。

しかし、それは決して開けてはならない禁忌の箱。一度それを開けてしまえば、もう後戻りはできるはずもない。なのに――椀はそれをなんとなしに開いてしまった。

「えっ……？」

その写真に写っていたのは、まだ幼さの残る顔で苦く笑う走馬と、そんな彼の手を握って満面の笑顔を浮かべる椀。そう、二人が白狼天狗の哨戒任務に初めて就いた時に「あの鴉天狗」に撮ってもらった写真だ。

幼馴染の腐れ縁とはいえ、二人は決して恋仲などではないし、時折その関係を聞いた仲間たちからそういうからかいを受けることもあるが、二人はあくまで「腐れ縁」に過ぎない。少なくとも椀はそう思っていたし、走馬もそうなのだろうと思っていた。

だが、思い返してみれば走馬と椀が二人で写った写真というのは、後にも先にもこの一枚だけだ。この写真を撮った数年後あたりから、椀はこの鴉天狗と不仲になつてしま

い、カメラから遠ざかるようになってしまったし、いつの間にか走馬も撮られることを嫌うようになっていった。

だから、この一枚だけなのだ。幼馴染だとか腐れ縁だとか、そういう繋がりを一切気にすることなく、まして「友達」なんて言葉で表すこともせず、ただ純粹に「仲がいい相手」として互いを見ていられたあの頃を思い出せるものは。

椀は懐の中に仕舞ったお守りの封を開き、その中から何かを取り出す。

「今時、こんな時代遅れの白黒写真を後生大事に持ち歩いている天狗なんて——」

そして、その四つ折りにされた中身を開くと、

「私とあなたくらいですよ」

二つのまったく同じ写真が、彼女の両手に納まっていた。